太宰府市の文化財　第41集

馬場遺跡

— 九州電力太宰府変電所建設に伴う —
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財　第41集

馬場遺跡

―第4次調査―

1999

太宰府市教育委員会

序

馬場遺跡第4次調査は太宰府市の北東部で、太宰府天満宮の南方にあたります。また、調査地東方には九州国立博物館建設予定地があり、今後さらに周囲の整備も進むものと考えられます。そして、博物館建設によって、アジアへの玄関口として古代大宰府と同じく大陸との交流が活発になることが期待できます。

さて、近年の電力消費量の増加は著しく、今後の需要に対応するため新しくこの地に変電所建設の計画がもち上がり、事前に埋蔵文化財の発掘調査を行うことになりました。

調査の結果、中世の墳墓の動向を知る上で貴重な遺跡であることが分かり、多くの成果を得ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、この調査及び整理に関して全面的に協力を得ました九州電力株式会社に対してまずお礼を申し上げると共に現地での作業に従事されました作業員の皆様、御指導・御教示頂きました皆様に心よりお礼申し上げます。

平成11年3月

太宰府市教育委員会

教育長　長野治己

例言

1. 本書は太宰府市石坂3丁目336-1他に所在する馬場遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 遺構の実測及び写真撮影は宮崎亮一、狭川真一、生田和宏が行い、調査区全景の空中写真は（有）空中写真企画が行った。また遺構全体図は、写真測量による図面作成を東亜建設技術株式会社に委託した。
4. 出土した鉄製品の保存処理は下川可容子、安藝朋江が行った。
5. 遺物の実測、写真撮影は宮崎が行った。
6. 図の浄書は宮崎が行った。
7. 本書の執筆は第4章（2）を狭川、その他は宮崎が行った。
8. 編集は、狭川の助言を得て、宮崎が担当した。

目次

1、調査経過と調査体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2、遺跡の位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

3、調査の成果

（1）現況と層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

（2）検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

（3）出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

4、まとめ

（1）各遺構の年代について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

（2）墳墓について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

1、調査経過と調査体制

近年の電力消費量の増加は著しく、今後の需要に対応するため変電所の建設が急務となり、九州電力株式会社はこの丘陵地に新しく変電所の建設を計画した。平成8（1996）年8月28日に変電所建設の届け出を受けた太宰府市教育委員会では、9月から九州電力株式会社と協議を重ね、変電所建設予定地の丘陵部分と地下に送電線を埋設する太宰府天満宮所有のグランド部分は、地下に影響を与えると考えられたため、遺跡の有無を確認の上、調査が必要であることが確認された。

これに基づいて太宰府市教育委員会では、平成9年4月14日～4月16日にかけて試掘調査を実施した。その結果、丘陵部分には全体的に遺構・遺物が確認された。丘陵北側のグランド部分は2m近い盛り土がある上、その下約2m付近まで青灰色砂や茶灰色砂が堆積し、さらに青灰色粘土が続く状況で、この部分は元来大きな谷であった様相を示し遺構の存在を確認することはできなかった。よって、遺構が確認された丘陵部分について調査を実施することとなった。現地での調査は太宰府市教育委員会が平成9（1997）年11月7日～平成10（1998）年2月16日まで実施し、これに伴う整理作業は、太宰府市文化ふれあい館において平成10（1998）年度に行った。また、これに伴う全ての費用は九州電力株式会社が負担した。開発対象面積は2783㎡、調査面積は1340㎡である。

なお、調査及び整理の関係者は以下のとおりである。

(平成9/1997年度)・・・・・発掘調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主事	今村江利子
調査	技術主査	狭川真一（調査担当）
	主任技師	城戸康利　山村信榮　中島恒次郎
		井上信正（事前審査・試掘担当）
	技師	高橋　学
		宮崎亮一（調査担当）
	技師（嘱託）	下川可容子　森田レイ子

(平成10/1998年度)・・・・・整理報告作業

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信

	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主事	今村江利子
調査	技術主査	狭川真一（整理担当）
	主任技師	城戸康利　山村信榮　中島恒次郎　井上信正
	技師	高橋　学
		宮崎亮一（整理担当）
	技師（嘱託）	下川可容子（保存処理担当）
		森田レイ子

調査参加者

増野芳枝　内野絹子　手嶌久子　森由美子　藤桑　藤宏栄　田中幸子　上原洋美　陶山小春
陶山よしゑ　和田ハマ子　中村勝子　安永可奈子　渡部敬子　土井澄子　松田路子　山下澤子
斉藤サヨ子　吉田正子　松田茂實　松田千代子　篠原一枝　副島栄子　村山一重　安武ハル子
草場美江子　小林妙子　小島國春　井上富士子　浦郷サダ子　竹下善政　青木貞子　市川友義
牛島イワヨ　城戸邦典　田中勝江　中島タキノ　原田経子　松島順子　南美智子　高原改良子
神田サダ子　大迫フミ子　藤原重登　鍵山恵子　徳永由美子　江島スミエ　白水スエ子
生田和宏

・整理参加者

武堂年子　瀬戸口みな子　藤野由貴子　安藝朋江　横山美津子　占部民子　中村房子　林美和子
菊武淑子　久保喜代香　原野正子　吉田勝子　相川寿美子

なお、調査及び整理に際しては次の方々からご指導、ご協力があった。記して感謝いたします。
（順不同・敬称略）

栗原和彦（九州歴史資料館）、小西信二（太宰府天満宮）

2、遺跡の位置と環境

馬場遺跡第4次調査は北東に宝満山、西に観世音寺の森を見渡せる標高77.5mの独立丘陵北西斜面に位置する。谷を隔てた南西方向には高雄山があり、以前は宝満山から南西に派生する大きな丘陵であったが、近年の宅地造成によってその雰囲気は大きく変わり、以前の様子を窺い知ることはできない。

しかし、この高雄丘陵では多くの貴重な遺跡が調査されている。この丘陵ではじめに遺跡が登場するのは縄文時代早期で、石穴遺跡第1次調査において小破片であるが押型文土器が出土している。その後活発な活動が見えはじめるのは弥生時代で、吉ヶ浦遺跡では中期後半から後期初頭にかけての甕棺墓群（72基）をはじめ竪穴住居跡（10棟）等が確認されている。特に甕棺墓からは布の一部や蓆など貴重な資料が発見されている。そして、古墳時代には4世紀代の割竹形木棺を内部主体とする下高尾古墳・菖蒲浦1号墳があり、後期の古墳群も周辺に見ることができる。その後、奈良～平安時代では顕著な遺構は未だ見出せないが、中世後期には高雄山に高尾山城が築かれている。現在も山中には段状造成や縦堀等が確認され、開発の波を受けながらも良好な状態で遺存している。

さらに、丘陵の西側は推定大宰府条坊の東端に位置している。この地域に都市の広がりを見せるのは大宰府政庁廃絶後で、特に平安時代後期に天満宮周辺では大規模な造成が行われるなど大きな改変がみられ、馬場遺跡第2次調査では南北方向に穿たれた大溝が確認されている。その後も太宰府天満宮の門前町として栄え、現在も年末年始には多くの参拝者で賑わっている。

なお、馬場遺跡第4次調査の北東側丘陵一帯は、九州国立博物館の建設予定地になっている。現在は緑豊かな森であるが、21世紀には自然と引き替えに博物館が建ち、周辺も大きく様変わりしていることだろう。

参考文献

『太宰府市史』考古資料編　1992

『高雄地区遺跡群』（太宰府市の文化財第22集）太宰府市教育委員会　1994

番号	遺跡名	遺構内容	番号	遺跡名	遺構内容
1	馬場遺跡第4次調査	12c中頃～14c中頃の墳墓群。今回報告。	9	光明寺	鎌倉中期創建。
2	馬場遺跡第1次調査	平安～近世の井戸、土壙。	10	原山無量寺跡（原八坊）	13c～14c後半の寺院跡。古代～12c後半の墓地。
3	馬場遺跡第2次調査	11c後半～12c前半の南北溝、建物。	11	横岳崇福寺跡	13c中頃～16c後半の禅宗寺院跡。
4	馬場遺跡第3次調査	平安時代の溝、石列、旧河道。	12	浦ノ城跡	鎌倉～室町時代の段造成跡
5	五条遺跡第2次調査	鎌倉後期の石組墓、火葬墓。	13	高尾山城跡	縦堀、段造成跡。中世。
6	君ヶ畑遺跡	平安前・中期の墳墓群。	14	連歌屋遺跡	中世～近世の町屋遺構。
7	鉾ノ浦遺跡	13c後半～14c前半の梵鐘など鋳造生産遺構。	15	大町遺跡	中世～近世の町屋遺構。
8	太宰府天満宮境内遺跡	平安・鎌倉時代の整地。柵列。	16	新町遺跡	中世～近世の町屋遺構。

Tab.1　馬場遺跡第4次調査周辺遺跡概要

Fig.1　馬場遺跡第4次調査周辺遺跡分布図（1/10000）番号はTab.1参照

Fig.2　馬場遺跡第4次調査周辺旧地形図（昭和23年、1/10000）

3、調査の成果

(1) 現況と層位

調査前は竹林などが混ざった雑木林で、所々にやや大きなクスノキが繁っていた。調査前の段階で丘陵の西斜面にはおよそ8段を数える段造成の跡が残っていた。

まず1段目の腐植土を除去すると赤色土が灰茶色土上に厚く堆積し、それに混じるように扁平な青灰色の石が多く確認された。この青灰色の石は横岳遺跡第1次調査や五条遺跡第2次調査で五輪塔の基壇に敷き詰められている例も見られることから、この付近もしくは上方の墓地に伴ったもので改葬などによって廃棄されたものと考えられる。また、3・4段目には真砂土の崩壊土が厚く堆積し、特に4段目は顕著で約2mの厚さで堆積し、旧地形と遺構面とが大きく異なる部分もでてきた。このことから大規模な丘陵の崩壊や造成があったことが考えられ、現状でみる地形は複数回にわたって人の手が加えられた後の姿であることが知られる。

なお、調査区は大きく8段に造成されているため、各段に1～8段の地区番号を与え調査を進めた。その後、調査の進展によって段数の変化があったものの当初の地区番号はそのまま踏襲している。

(2) 検出遺構

調査の結果、遺構は1～3段目の高所を中心に展開し、木棺墓3基・土壙墓3基のほか土坑・溝等が検出された。4段目より下の段では火葬施設等が検出されただけで殆ど遺構は見られなかった。

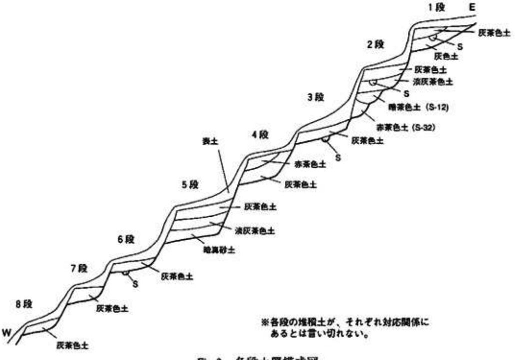


Fig.3　各段土層模式図

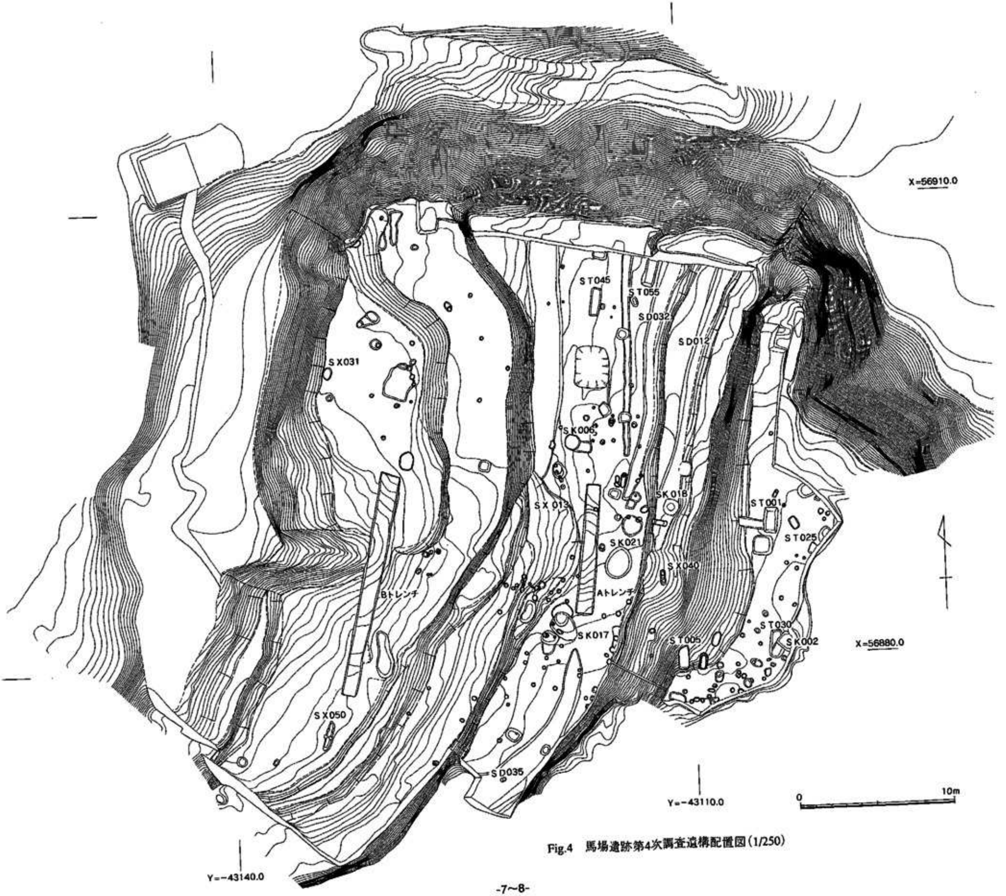


Fig.4　馬場遺跡第4次調査遺構配置図(1/250)

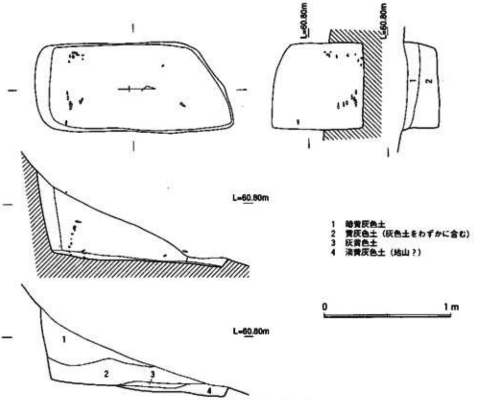


Fig.5　4ST005遺構実測図（1/30）

以下遺構の性格別に報告する。

木棺墓

4ST005（Fig.5、Pla.5・6）

1段目に位置し、主軸をG.N-0°50′-Eにとる鉄釘を使用した木棺墓である。墓壙は谷状遺構(4SX060)の埋没土上面に切り込んで造られているが、その後の崩落によって、全てが残存していない。現存する墓壙の平面形は長方形を呈し、長さ1.56m、幅0.71m、深さ0.70mを測り、出土遺物は青磁椀1点、鉄釘17点である。青磁椀についてはバックホーによって掘り出してしまったが、辛うじて墓壙内に遺存していた破片の出土位置から木棺墓の北端にあったと見られ、おそらく棺上の供献土器で、木棺崩壊後に棺上からの転落したものと考えられる。また、鉄釘の出土状況から推定して木棺は長さ1.3m以上、幅0.4mに復元される。また、青磁椀の出土位置から、頭位は北向きと考えられる。

4ST030（Fig.6、Pla.7・8）

1段目に位置し、主軸をG.N-5°10′-Eにとる鉄釘を使用した木棺墓である。墓壙の平面形は長方形を呈し、長さ1.76m、幅0.66m、深さ0.38mを測る。東側を近世墓の改葬と考えられる攪乱が切っている。出土遺物は土師器坏1点、土師器小皿3点、青白磁皿1点、鉄釘7点である。青白磁皿は出土段階ですでに口縁部の一部が欠損しており、供献に際して故意に破砕されたものとみている。また、これらの土器は斜めに崩れ落ちたような出土状況を示していることから、棺上に供献

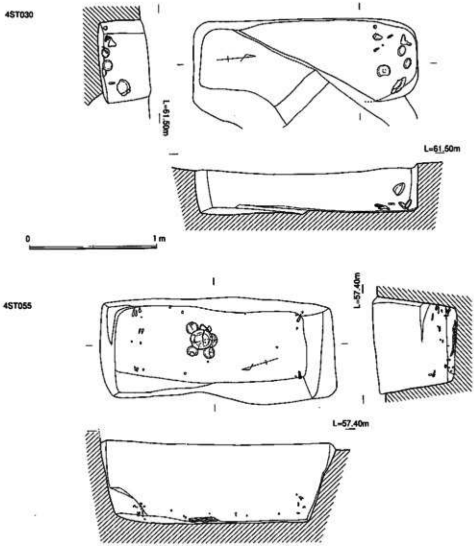


Fig.6　4ST030・055遺構実測図（1/30）

された土器で、木棺崩壊後に棺上からの転落したものと推定される。鉄釘の遺存数が少ないため、鉄釘の出土状況から木棺の長さや幅を推定復元することはできなかった。また、供献土器の出土位置から、頭位は北向きと考えられる。

4ST055（Fig.6、Pla.9・10）

3段目の北側に位置し、主軸をG.N-16°40′-Eにとる鉄釘を使用した木棺墓である。墓壙の平面形は長方形を呈し、長さ1.84m、幅0.77m、深さ0.66mを測る。出土遺物は土師器坏1点、土師器小皿5点、鉄釘33点である。これらの土器は出土状況から、棺上の中央付近に供献された土器で、木棺崩壊後に棺上から転落したものと考えられる。さらに鉄釘の出土状況から推定して木棺は長さ1.25m、幅0.48mに復元される。墓壙の幅が北側にやや広いことから、頭位は北向きと推測される。

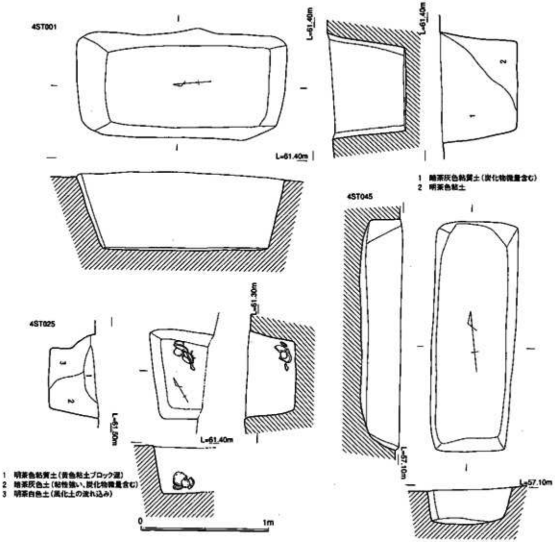


Fig.7　4ST001・025・045遺構実測図（1/30）

土壙墓

4ST001（Fig.7、Pla.11）

1段目に位置し、主軸をG.N-4゜30′-Eにとるもので、釘が検出されていないことから、土壙墓として取り扱うこととした。墓壙の平面形は長方形を呈し、長さ1.64m、幅0.83m、深さ0.62mを測る。出土遺物は水注片と土師器片が検出されたが、土層観察では自然堆積の状況を示し、埋土全体に土師器片がみられることから、これら遺物は周囲からの流れ込みと考えられる。

4ST025（Fig.7、Pla.12）

1段目の調査区際に位置しているため、墓壙全体は把握できない。狭い範囲であるが釘が検出されていないことから、土壙墓として取り扱うこととした。主軸をG.N-59゜20′-Wにとり、墓壙は長さ0.5m以上、幅0.71m、深さ0.39mを測る。平面形は他と同様に長方形を呈するものと考えられ

る。出土遺物は土師器坏2点、土師器小皿4点である。これらの土器は墓壙端に斜めに崩れた状態で出土した。釘が確認されず木棺の存在が認められないことから、これらの土器は、土壙に木蓋等が存在し、その上に供献された土器で、木蓋崩壊後に転落したものと推測される。また、供献土器の出土位置から、頭位は西向きと推測される。

4ST045（Fig.7、Pla.13）

3段目に位置し、主軸をG.N-7°25′-Eにとるもので、釘が検出されていないことから、土壙墓として取り扱うこととした。墓壙の平面形は長方形を呈し、長さ1.81m、幅0.65m、深さ0.21mを測る。遺物は全く検出されていない。また、墓壙の幅が南側より北側の方が広いことから、頭位は北向きと推測される。

火葬施設

4SX050（Fig.8、Pla.14・15）

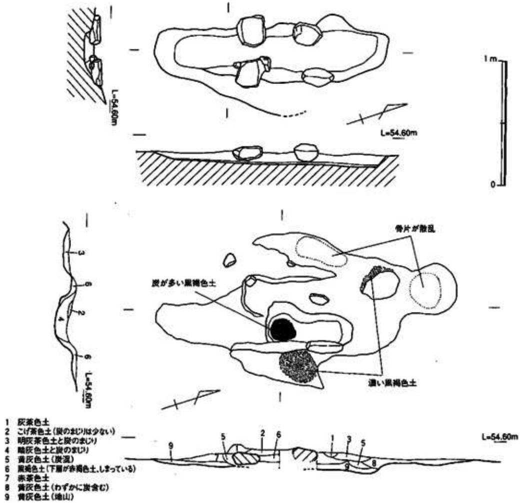


Fig.8　4SX050遺構実測図（1/30）

5段目で検出された火葬施設で、主軸をG.N-18° 30′ -Eにとる。表土除去後、南北1.2m、東西0.62mの不定形の範囲に炭混じりの灰茶色土が検出され、部分的に黒褐色や赤茶色の強い部分などがみられ、全体的に骨片も散らばっていた。この炭混じりの灰茶色土を掘り下げると、長さ0.94m、幅0.2m、深さ0.12mの土壙状遺構が検出され、その土壙の中央付近に土壙を挟んで大きさ7～13cmの川原石が2個づつ置かれ、南側の2個については平坦面が上になるように置いている。川原石は全て焼け焦げ、その配置状況から木棺をのせる棺台と考えられる。土壙内は炭混じり暗灰色土の下に土壙側面を覆うように厚く黒褐色の灰が堆積し、その下には赤茶色に変色し固く締まった焼壁が検出された。

溝

4SD012

2段目の東側法面下に掘られた検出長19.0m、最大幅2.5m、深さ0.1mの浅い溝である。溝の南側は谷状遺構付近で途切れているが、さらに南側に続いていたと考えられる。

4SD032

3段目の東側法面下に掘られた検出長15.8m、最大幅2.5

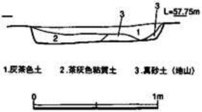


Fig.9　4SD035土層観察図（1/30）

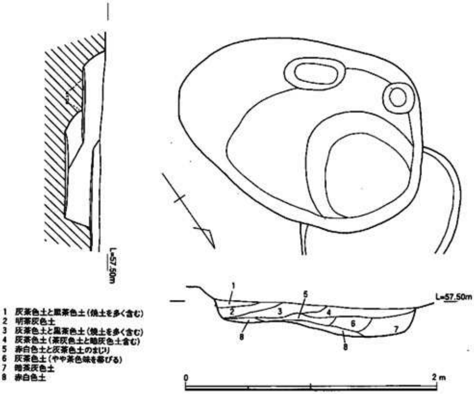


Fig.10　4SK017遺構実測図（1/30）

m、深さは3段目平坦面から0.1mの浅い溝で、埋土の上には2段目を形成している赤茶色土が覆っていた。3段目の段造成に伴って掘られ、2段目の造成または2段目斜面の崩壊によって埋没した溝と考えられる。

4SD035（Fig.9、Pla.16）

3段目の東側法面下に掘られた検出長12m、最大幅3.0m、深さ0.15mの浅い溝で、上部には真砂土のような表土が厚く堆積していた。堆積状況は全体的に表土と同様の真砂土と灰茶色土が、北側は部分的に茶灰色粘質土が堆積している。3段目の段造成に伴って掘られた溝と考えられる。

土坑

4SK002

1段目で検出された。平面形は隅丸方形で、南北1.0m、東西1.15m、深さ0.5mを測り、4ST030を切っている。調査区際のため全容は掴めないが、周囲の状況から近世墓の改葬の跡と考えられる。

4SK006（Fig.11、Pla.16）

3段目で検出された。平面形は略円形を呈し、南北0.98m、東西0.95m、深さ0.08mを測る。川原石や土器片を含み、坏aなど完形のものも含まれるが、大量廃棄という程の遺物量は検出されていない。

4SK017（Fig.10、Pla.17）

3段目で検出された。平面形は略円形を呈し、長辺1.95m、短辺1.5m、深さ0.4mを測る。埋土から大きく2回の堆積状況が窺え、最初に自然堆積のような土層がみられ、その上は西側から投げ入れたような堆積状況を示し、その堆積中位には焼土が多く含まれている。

4SK018（Fig.11、Pla.18）

2段目中央付近に位置し、4SD012の堆積層の下から検出された。ほぼ円形で1.07m×0.97m、深さ0.49mを測る。遺物は殆ど検出されていないが、内部には30cm前後でやや大きめの花崗岩礫が投げ込まれている。また、この花崗岩礫の中には火を受けたものも含まれており、埋土にも炭が少量含まれている。

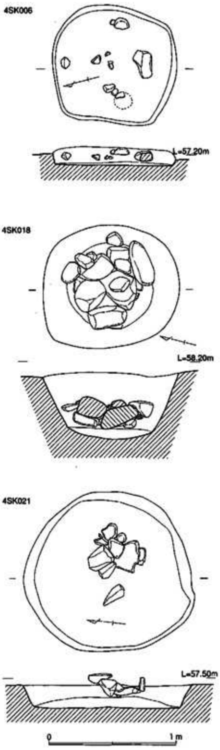


Fig.11　4SK006・018・021遺構実測図（1/30）

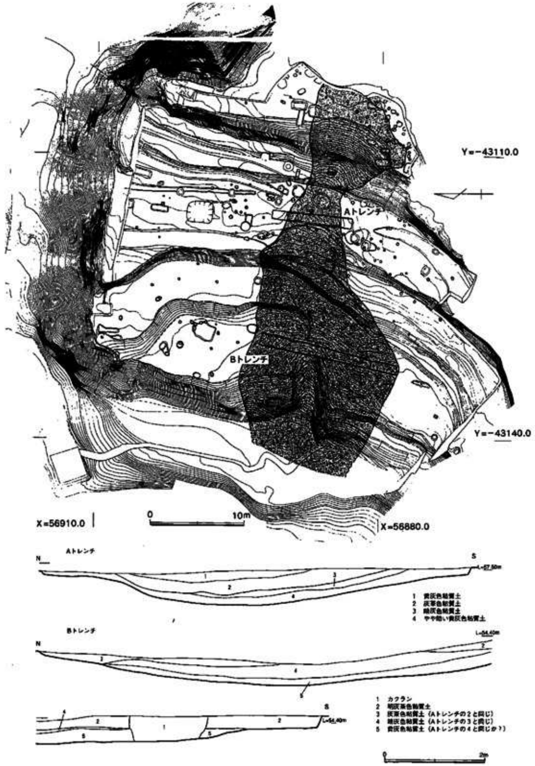


Fig.12　4SX060遺構範囲図・土層観察図（1/400、1/75）

4SK021（Fig.11、Pla.17）

3段目中央付近で検出された。平面形は円形を呈し、南北1.32m、東西1.26m、深さ0.19mを測る。川原石が土坑の中央付近に集積し、それに混じって土師器坏ｂが1点出土したが、盗難にあったため詳細は不明。

谷状遺構

4SX060（Fig.12、Pla.19）

調査区中央付近で検出された検出長42m、最大幅17mの谷状遺構で、段造成の1段目から8段目まで灰色系の埋土が確認でき、調査区内を越えさらに西側に続いていく様子が窺える。調査では谷を横断するトレンチを2ヶ所設定し、3段目のものをAトレンチ、7段目付近のものをBトレンチとした。深さはAトレンチで約0.7m、Bトレンチで約0.5mである。全体的に遺物は少なく底面に近い程遺物は殆どみられない。A、Bトレンチで確認した堆積土は、段造成によって改変されているため、各段の土層の相関関係は不明確である。また、7段目から8段目にかけての灰茶色粘質土上に、石や小石を多く含む灰色土層がU字形に堆積している。また、表土除去直後に2地点（SX013・040）で完形の青磁椀等が検出され、灰色土層中にも多くの陶磁器片が礫に混じって検出されている。

その他の遺構

4SX013（Pla.22）

3段目の谷状遺構（4SX060）上に位置し、龍泉窯系青磁椀と土師器の小皿がまとまって検出された地点である。しかし、周囲から墳墓や土壙のプランは確認できず、谷状遺構の崩壊によって上方から転落してきたものと推測される。

4SX020（Fig.13、Pla.20）

1段目で検出された。焼土（黒褐色土）が固く締まり、焼けた床の残骸のような状況である。その焼土の範囲は南北0.65m、東西0.39m、深さ0.1mを測る。遺構の中央付近で円形状に灰茶色土が検出された。また、黒褐色土の硬化面周囲は焼成温度が高かったためか地山も2cm程赤紫色に変色している。

4SX031（Fig.13、Pla.21）

7段目に位置する南北0.74m、東西0.43m、深さ0.08mを測る長方形の焼土壙である。埋土には黒褐色や赤茶色などの焼土が不規則に見られる。また、表土除去後の遺構面には骨片が確認されたことから火葬施設の可能性が考えられる。

4SX040（Pla.22）

2段目の谷状遺構（4SX060）上に位置し、龍

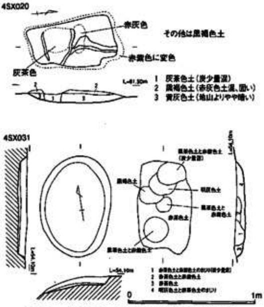


Fig.13　4SX020・031遺構実測図（1/30）

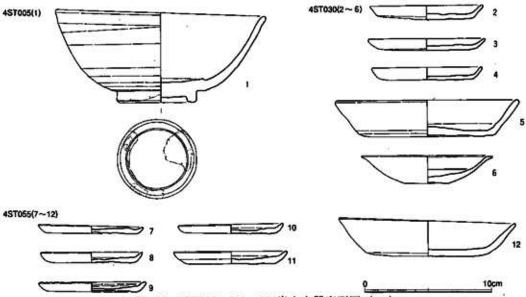


Fig.14　4ST005・030・055出土土器実測図（1/3）

泉窯系青磁椀と白磁皿が検出された地点である。しかし、周囲から墳墓や土壙のプランは確認できず、谷状遺構の崩壊によって上方から転落してきたものと推測される。

(3) 出土遺物

木棺墓

4ST005出土遺物（Fig.14・15、Tab.6、Pla.26・29）

龍泉窯系青磁

椀（1）　口径16.5cm、器高7.4cm、底径6.25cmを測る。内外面とも無文で、高台内面と高台外面の一部以外の全面に灰白色の釉が施され、高台畳付けに3ヶ所の目跡が残っている。胎土は灰白色と黄白色で、0.1cm程の砂粒を含んでいる。I-1類。

鉄製品

釘（13～29）　完形品はなく、全て欠損している。全体的に長さにばらつきが見られるが、木目の変化点から先端までの長さを計測すると大きく大小2種類があったと推定される。木目の変化位置は上端から1.6～3.3cmのばらつきがみられるが、厚さ1.6cmと3.3cm前後の2種類の棺材が想定される。しかし、遺存数が少ないため各部材の厚さを特定することはできなかった。

4ST030出土遺物（Fig.14・15、Tab.6、Pla.24・26）

土師器

小皿a（2～4）　口径8.6～9.2cm、器高0.95～1.15cm、底径7.3～7.5cmを測る。2のみ糸切りによる底部切り離しが確認できるが、その他の調整等は風化が著しく不明。

坏a（5）　口径14.4cm、器高2.9cm、底径10.3cmを測る。調整は内外面ともヨコナデ。内面見込み部分はナデ。底部切り離しは糸切りで、板状圧痕が認められる。

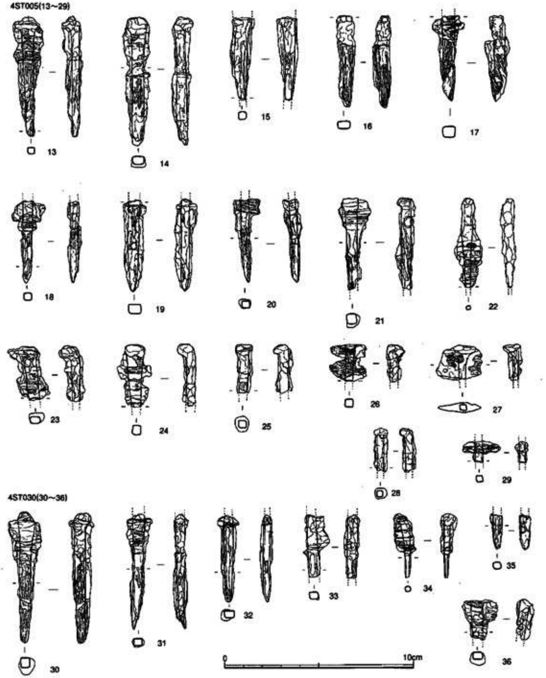


Fig.15　4ST005・030出土鉄釘実測図（1/2）

青白磁

皿（6）　口径10.25cm、器高2.25cm、底径3.3cmを測る。外面底部はやや上げ底気味で、全面に薄く青白色に発色する釉を施し、その後に外面底部の釉を掻き取っている。内面中位には浅い沈線が巡る。胎土は灰白色で不純物は少ない。口縁は一部欠損しているが、4ヶ所に輪花が施されて

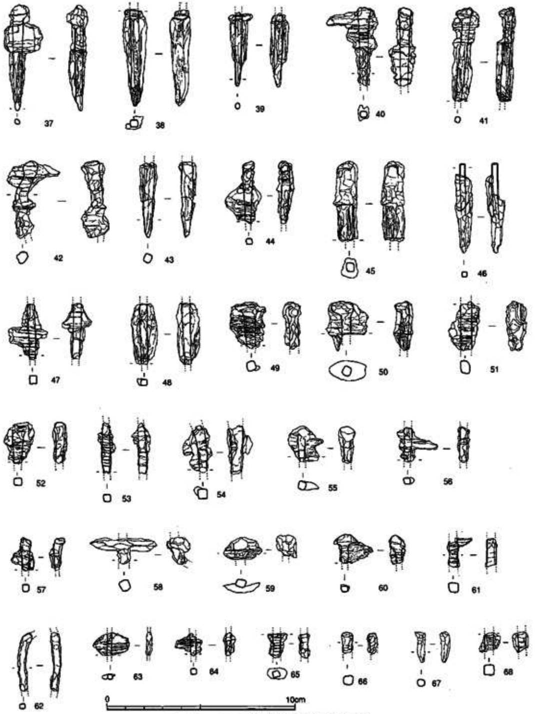


Fig.16　4ST055出土鉄釘実測図（1/2）

いる。また、口縁の一部にみられる欠損は供献前に打ち欠いたものと考えられる。

鉄製品

釘（30～36）　完形品は1点のみで他は欠損品である。木目の変化位置から棺材の厚さは2.6cm

Fig.17　4ST001・025出土土器実測図（1/3）

前後と推定される。

4ST055出土遺物（Fig.14・16、Tab.6、Pla.25・27）

土師器

小皿a（7～11）　7～9・11は糸切りによる底部切り離しを行う。その他は風化が著しく不明。口径8.1～8.9cm、器高0.75～1.0cm、底径6.7～7.4cmを測る。いずれも風化及び破壊が著しく調整は不明瞭である。11は内外面ともヨコナデ、内面見込み部分は不定方向のナデが施されている。

坏a（12）　風化が著しいが、調整は内外面ともヨコナデで、糸切りによる底部切り離しを行っている。板状圧痕等は確認できない。口径13.9cm、器高3.0cm、底径9.6cmを測る。

鉄製品

釘（37～68）　完形品は1点のみで他は欠損品である。完形の37は長さ5.6cmである。木目の変化位置から棺材の厚さは約2cmと推定される。出土点数は多いものの小片が多い。

土壙墓

4ST001出土遺物（Fig.17、Pla.29）

陶器

水注（1）　注ぎ口の部分で、ヨコナデのあと施釉されている。釉は暗茶褐色に発色するが、剥落が目立ち、内外面とも僅かに残っている程度である。胎土は暗灰色で、白色微砂粒を多く含む。棺外からの混入と思われる。

4ST025出土遺物（Fig.17、Pla.28）

土師器

小皿a（2～5）　口径7.3～7.9cm、器高1.15～1.45cm、底径6.0～6.3cmを測る。調整は風化が著しく不明。

坏a（6・7）　口径12.4～12.6cm、器高2.6～2.8cm、底径8.1～8.5cmを測る。両者とも一部が変形している。調整は風化が著しく不明。

火葬施設

4SX050出土遺物（Fig.18）

瓦

軒丸瓦（1）　軒丸瓦の周縁部で、珠紋が4個見られる。他は剥落している。風化が著しい。

Fig.18　4SX050出土遺物実測図（1/3）

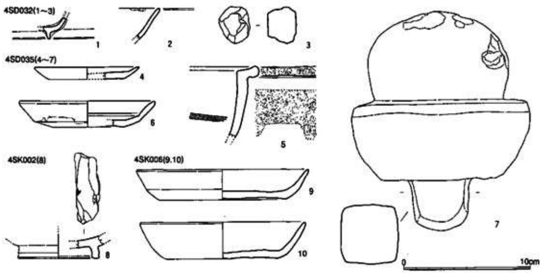


Fig.19 溝・土坑出土遺物実測図（1/3）

溝

4SD032出土遺物（Fig.19、Pla.29）

龍泉窯系青磁

坏（1）　高台付近が残存。高台畳付け以外は全面施釉されている。III類。

陶器

坏（2）　白黄色の釉が口縁端部に僅かに残存している。胎土は黄白色で極めて細かい不純物を含んでいる。

瓦製品

瓦玉（3）　大きさは2.9cm×2.5cm、厚さ2.2cm。瓦面は暗灰色に燻されている。

4SD035出土遺物（Fig.19、Pla.29）

土師器

小皿a（4）　小片であるが、口径8.2cmに復元できる。調整等は風化が著しく不明。

鍋（5）　外面は厚く煤が付着している。内面はヨコハケが僅かに観察できる。

同安窯系青磁

皿（6）　I-1-a類

石製品

五輪塔（7）　空風輪である。凝灰岩製で全体的に風化が著しく、一部欠損も見られる。ホゾは方形を呈している。全長17.4cm、空輪の高さ7.0cm、最大径11.0cm、風輪の高さ6.4cm、最大径14.0cm、ホゾの高さ4.0cm、最大幅5.0cmである。

土坑

4SK002出土遺物（Fig.19、Pla.29）

青白磁

椀（8）　高台付近が残存し、畳付け以外は施釉されている。内底部には同心円状に強いヨコナデによる条痕がみられ、暗青緑色の施文が僅かに残っている。

4SK006出土遺物（Fig.19、Pla.29）

土師器

坏a（9・10）　復元口径13.1～13.6cm、器高2.4～2.9cm、底径8.8～9.9cmを測る。風化が著しいが、内外面ともヨコナデが僅かに残り、底部には板状圧痕が残る。底部切り離しは不明。

その他の遺構

4SX013出土遺物（Fig.20、Pla.30）

土師器

小皿a（1～3）　口径8.3～8.6cm、器高1.05～1.15cm、底径6.4～7.0cmを測る。底部切り離しは全て糸切りである。1の底部には板状圧痕が見られる。2・3の内面見込み部分には不定方向のナデが施されている。

坏a（4）　口径13.3cm、器高2.75cm、底径9.5cmを測る。調整は内外面ともヨコナデ。底部切り離しは糸切りである。底部外面には板状圧痕が残る。

龍泉窯系青磁

椀（5）　口径16.2cm、器高7.2cm、底径7.7cmを測る。口縁内面に浅い沈線が巡る。釉は黄緑色で、畳付けと高台内面以外は、全面に施釉されている。内面見込み部分には、不明瞭ながら「利」と読めるスタンプが見られる。また、内面の一部には薄く灰茶色の付着物が見られる。I-1-c類。

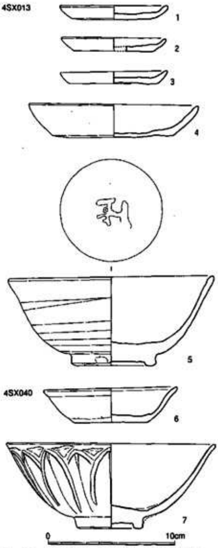


Fig.20　4SX013・040出土土器実測図（1/3）

4SX040出土土器（Fig.20、Pla.30）

白磁

皿（6）　完形品である。口径10.5cm、器高2.8cm、底径5.7cmを測る。口縁端部内面と底部外面は釉が掻き取られている。底部外面はヘラケズリの痕跡が見られる。IX-2類。

龍泉窯系青磁

椀（7）　口縁部を僅かに欠損しているが、ほぼ完形で、口径16.5cm、器高6.9cm、底径5.2cmを測る。胎土は暗灰色で、黒色の微砂粒を若干含む。高台内面から畳付け以外全面施釉され、全体的に大きな貫入が見られる。I-5-b類。

4SX060出土遺物（Fig.21・22、Pla.31）

土師器

小皿a（1）　復元口径7.2cm、器高1.2cm、底径6.0cmを測る。調整は内外面ともヨコナデ。底部切り離しは糸切りである。

小皿b（2）　復元口径7.5cm、器高1.65cm、底径5.8cmを測る。調整は風化のため不明である。底部切り離しは糸切りである。

白磁

椀（3）　口縁部のみ。IX類

龍泉窯系青磁

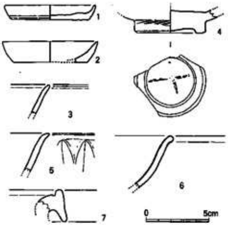


Fig.21　4SX060出土土器実測図（1/3）

椀（4・5）　4は底部付近で高台と体部の境付近には工具痕跡が残り、左回りにロクロが回転していたことが理解できる。釉は畳付けから高台内面以外は施釉され、細かな貫入がみられる。また、高台内面には「十」字形の墨痕が僅かに観察される。I類。5は口縁部のみ。III類。

高麗青磁

椀（6）　体部中位から口縁部にかけての破片で、丸味を持った体部で、口縁端部が僅かに外反する。釉は透明感のある青味がかった緑色で、光沢があり、貫入も見られる。胎土は暗灰色で白色微粒子を多く含む。

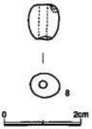


Fig.22　4SX060出土小玉実測図（1/1）

陶器

甕（7）　口縁部のみで全体的に薄茶色を呈し、ヨコナデされている。胎土は0.1～0.2cmの白色砂粒を多く含み、焼成は良好である。常滑産と考えられる。

ガラス製品

小玉（8）　長さ0.9cm、径0.8×0.6cmでやや変形しており、径0.2cmの穿孔がある。色調は淡青色を呈し、透明感は全くない。

1段目堆積土出土遺物

（Fig.23・24、Pla.32）

龍泉窯系青磁

椀（1）　鎬蓮弁文の椀で、口径16.6cm、器高6.5cm、底径5.3cmを測る。胎土は淡灰色で、不純物等は見られない。高台内面と畳付けを除いた全面に青緑色の釉を

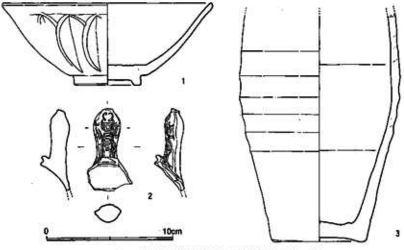


Fig.23　1段目堆積土出土土器実測図（1/3）

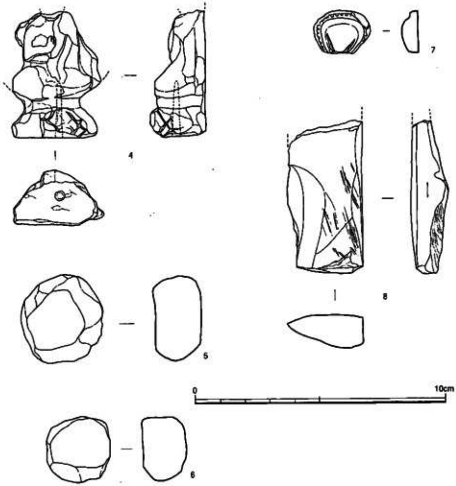


Fig.24　1段目堆積土出土遺物実測図（2/3）

施している。灰色土出土。I-5-b類。

陶器

行平（2）　把手付近である。口縁端部に溝状の受け部があり、その部分は施釉されてない。その他は白茶色に薄く施釉されている。把手の部分は茶緑色で型によって文様を作り出している。

壷（3）　体部のみ残存している。底部外面にはヘラケズリ痕跡が残る他は全てヨコナデである。色調は茶灰色を呈し、胎土は0.1cm以下の白色砂粒と黒色の微粒子を多く含んでいる。灰茶色土出土。

瓦製品

仏像（4）　現存高5.1cm、現存最大幅3.6cm、厚さ2.2cmを測り、頭部と光背の殆どが欠損している。全体的に風化が目立つが、右手は胸元で手印を結び、左手は膝上に置かれている状態が確認できる。背面は平坦にナデられている。台座は受花と逆花座があり、受花は無文で、逆花座は格子状の刻線が施されている。底面には棒を差し込んだと考えられる径0.3cm、深さ2.2cmの穴が

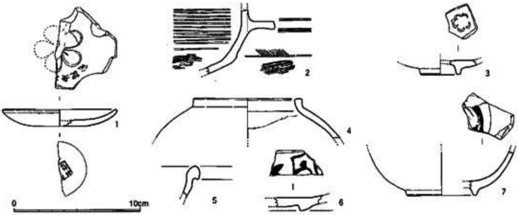


Fig.25　2段目堆積土出土土器実測図（1/3）

開けられている。この形状から如来像と推定される。灰茶色土出土。

瓦玉（5・6）　5は3.3×3.5cm、厚さ1.9cmで全面風化が著しい。6は大きさ2.6×2.6cm、厚さ1.7cmで円形状を成している。灰茶色土出土。

土製品

おはじき（7）　タテ1.7cm、ヨコ2.2cm、厚さ0.6cmで、表面は型抜きによって周縁に鋸状の文様、中央に刻線状の文様が作り出され、裏側は平坦にナデられている。色調は白黄色を呈している。灰茶色土出土。

石製品

砥石（8）　泥岩製で、6.15cm×3.0cm、厚さ1.5cmで3面に使用痕跡が確認できる。1面は欠損し、1面は自然面が残っている。灰茶色土出土。

2段目堆積土出土遺物（Fig.25・26、Pla.32）

土師器

小皿（1）　復元口径17.0cm、器高1.3cm、底径4.2cmを測る。ロクロ成形後文様を作り出した内型に当てて、内底文様を浮きだたせ、仕上げにナデている。内底には梅鉢文と「□祭記念」の文字が見られる。大町遺跡ではタイプは少々異なるが「太宰府天満宮　千弐拾五年大祭記念」と書かれた小皿が出土していることから、このような文字があったと考えられる。ちなみに千弐拾五年大祭については昭和2（1927）年に行われたものである。灰茶色土出土。

瓦質土器

羽釜（2）　色調は内側が白灰色、外側が暗灰色を呈している。胎土は0.1cm以下の細砂粒を多く含む。調整は鍔の部分の上下と体部下方の段差にハケ目が顕著に残り、その他にも僅かにヨコハケが残っている。内面にはやや太いヨコハケと不定方向のナデが施されている。灰茶色土出土。

陶器

椀（3）　底部付近で、高台復元径3.2cmを測る。胎土は茶灰色で目立った砂粒は見られない。釉は茶緑色で、畳付け以外施釉され、細かい貫入がみられる。内底には花文状のスタンプが残っ

ている。暗茶色土出土。

壷（4）　短い口縁部は直口縁のように曲げられ、復元口径8.6cmを測る。調整は外面はヘラケズリ、内面はヨコナデされ、深緑色の釉で口縁部の内外面のみ施釉し、口縁端部上面は露胎である。灰茶色土出土。

緑釉陶器

鉢（5）　口縁端部のみで、残存面には施釉された釉が明瞭に残存している。胎土は明灰色で黒茶色の細砂粒を多く含む。釉調などから輸入品と考えられる。灰茶色土出土。

染付

椀（6・7）　5は削り出しの高台付近が残存している。釉は灰白色で貫入が見られる。畳付けには目跡があり、高台内面は露胎で、明赤色に変色している。内底には深青色の文様が施されている。明代のものと考えられる。6は口縁部は復元できないが、底部は径5.6cmに復元できる。胎土は白灰色で茶色の小さな不純物を若干含んでいる。釉は白灰色で高台内面と畳付け以外は施釉されている。灰茶色土出土。

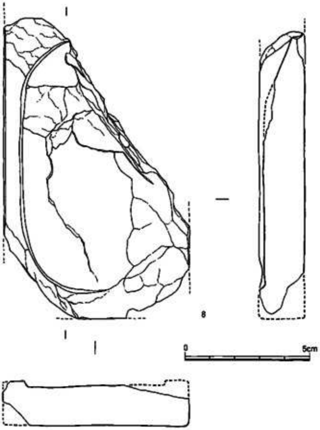


Fig.26　2段目堆積土出土硯実測図（2/3）

石製品

硯（8）　小豆色をした頁岩製で、幅7.4cm、厚さ2.8cmを測り、元来長さ13cm程の長方形をしていたと考えられる。使用面の深さは0.3cm程で両端は丸く仕上げられている。その他の面は粗く研磨されている。灰茶色土出土。

3段目堆積土出土遺物（Fig.27・28、Pla.33・34）

土師器

坏a（1～3）　1・2は口径13.5～13.6cm、器高2.3～2.6cm、底径9.2～10.2cmを測る。風化が著しく調整は不明。2の内面には煤が付着している。1・2は赤茶色土出土。3は口径11.2cm、器高2.45cm、底径7.6cmを測る。調整は風化で不明。底部調整はヘラ切りか。暗灰色土出土。

小皿a（4）　口径7.7cm、器高1.0cm、底径6.1cmを測る。調整はヨコナデ。底部調整は糸切りで、板状圧痕が残る。灰茶色土出土。

鍋（5）　口縁部を僅かに外反させ、内側に稜を作る。表面は風化が目立つ。外面下部は二次焼

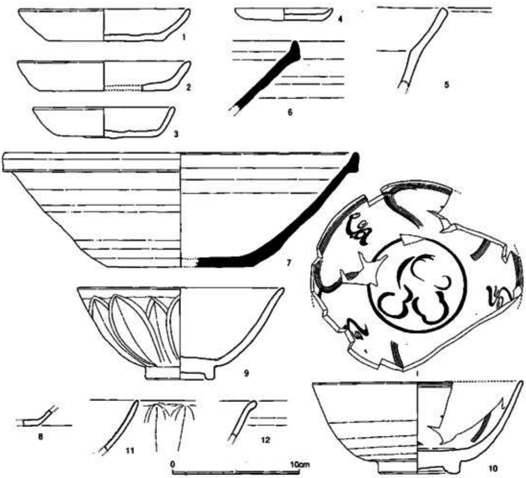


Fig.27　3段目堆積土出土土器実測図（1/3）

成によって黒灰色に変色している。灰茶色土出土。

須恵質土器

鉢（6・7）　6は胎土は0.1cm前後の砂粒を多く含むもので、色調は外面が淡灰色、断面が青灰色を呈し、内面は黒褐色の自然釉がかかっている。外面はヨコナデが観察される。東播系。7は外面底部に糸切り痕跡が残り、内面中位以下には使用による磨耗が顕著に認められる。東播系。6・7共に灰茶色土出土。

白磁

皿（8）　底部のみ残存。IX-1類。明灰茶色土出土。

龍泉窯系青磁

椀（9～12）　9は釉が暗緑色を呈し、高台内面以外は全面施釉されている。高台畳付けは使用による磨滅が見られる。I-5-b類。10は釉は黄色を帯びた緑色で、内外面とも細かな貫入が見られる。I-4-a類。9・10とも灰茶色土出土。11はIII-2類。明灰茶色土出土。12は口縁端部がやや外反する。胎土は灰白色で不純物はないが、気泡が目立つ。釉は緑茶色で貫入が見られる。IV類。灰茶

色土出土。

石器

刃器（13） 安山岩製で、タテ10.85cm、ヨコ5.1cm、厚さ1.5cmを測る。全体的に大きく打ち欠いたあと側縁部を細かく調整している。灰茶色土出土。

4段目堆積土出土遺物（Fig.29、Pla.36）

瓦製品

瓦玉（1） 4.1×4.4cm、厚さ1.9cm。灰茶色土出土。

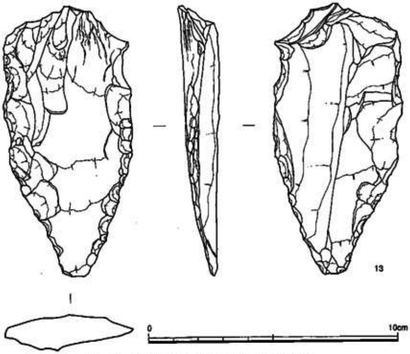


Fig.28 3段目堆積土出土石器実測図（2/3）

5段目堆積土出土土器（Fig.29、Pla.35）

須恵器

坏c（2） 口径14.1cm、器高4.5cm、底径9.9cmを測る。調整は風化が著しく不明。淡灰色土出土。

土師器

小皿a（3） 復元口径8.5cm、器高2.4cm、底径5.8cmを測る。調整は回転ナデで、底部調整は糸切り。灰茶色土出土。

鍋（4） 口縁部分で、稜を持って外反させ、丸く仕上げている。復元口径23.0cmを測る。内面はヨコナデ、外面には厚く煤が付着している。灰茶色土出土。

青白磁

皿（5） 胎土はやや黄色を帯びた白色で、茶色の微粒子を多く含む。釉は薄い水色で大きな貫入が見られる。底部外面は露胎で、回転ヘラケズリ痕跡が残っている。内面底部にはヘラ描きの文様が施されている。灰茶色土出土。

5段目堆積土出土遺物（Fig.29・30、Tab.6、Pla.35）

瓦製品

瓦玉（6～8） 6は3.35×2.9cm、厚さ2.05cmで全体的に風化が目立つが、瓦表面の残っている部分に格子叩の痕跡が僅かに確認できる。淡灰色土出土。7は2.4×2.8cm、厚さ1.8cmで方形をしている。8は5.3×5.1cm、厚さ1.9cmで、瓦側面が残存している。7・8は灰茶色土出土。

石製品

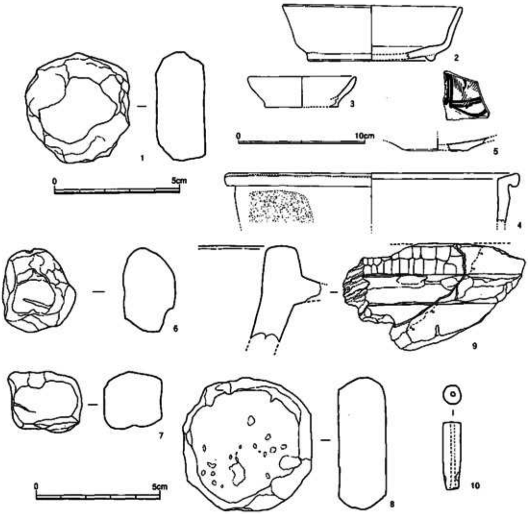


Fig.29　4・5段目堆積土出土遺物実測図（1/3、2/3）

石鍋（9）　滑石製で、口縁部付近に内外面ともヘラケズリの痕跡が残る。外面には二次焼成による煤が付着している。淡灰色土出土。

土製品

錘（10）　タテ2.7cm、径0.7cmで、その中央に径0.15cm程の穿孔がある。色調は灰黄色で、表面は風化している。淡灰色土出土。

鉄製品

釘（11・12）　11は完形ではないが、釘の形状を良好に残している。灰茶色土出土。

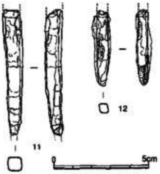


Fig.30　5段目堆積土出土鉄釘実測図（1/2）

7段目堆積土出土土器（Fig.31、Pla.36）

陶器

行平（1）　口縁部を丸く屈曲させ、受け部を作っている。体部外面にはトビガンナ痕を付けている。内面の口縁端部以外は紫茶色に施釉されている。灰茶色土出土。

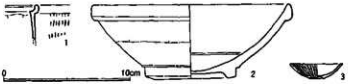


Fig.31　7・8段目堆積土出土土器実測図（1/3）

8段目堆積土出土土器　（Fig.31、Pla.36）

白磁

椀（2）　全体に欠損が目立つが、口縁部まで復元することができる。復元口径15.7cm、器高6.0cm、底径6.6cmを測る。IV-2類。灰茶色土出土。

磁器

紅皿（3）　口径4.1cm、器高1.2cm、底径1.25cmを測る。外面は肉彫りで花弁状に表現している。肥前系。灰茶色土出土。

表土出土土器（Fig.32、Pla.36）

土師器

小皿（1）　ロクロ成形後文様を作り出した内型に当てて、内底文様を浮き出たせ、仕上げにナデている。外面底部には「福原太兵衛」と刻まれたスタンプが見られる。

白磁

坏（2）　口縁部のみであるため形状の推定は難しいが、坏状になると考えられる。内外面とも施釉されるが、一部下方が露胎。ヘラケズリ調整が見られる。貫入あり。

鉢（3）　高台付近のみで、復元底径は10.4cmを測る。体部と高台の境付近にはヘラケズリ時の小刻みなカンナ痕跡が残っている。残存部分では外面の施釉は見られず、内面底部は輪状に掻き取っている。高台畳付け部分は使用したことによる磨滅が見られる。VIII類。

龍泉窯系青磁

小椀（4）　復元口径は9.7cm、器高4.2cm、底径3.7cmを測る。畳付けと高台内面以外は全面施釉され、貫入が見られる。露胎の高台内面には回転ヘラケズリ痕跡が確認できる。胎土は灰白色で黒茶色の微粒子を多く含む。釉は淡灰色で光沢はあるが透明感はない。

I-1類。

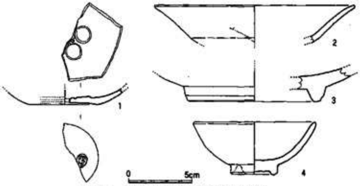


Fig.32　表土出土土器実測図（1/3）

4、まとめ

(1) 各遺構の年代について

各遺構の年代と若干の所見について以下のように記述する。なお、本書中の遺物の年代観は山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究IV』(1988) 等による。

木棺墓

4ST005

龍泉窯系青磁椀I-1類のみの出土であり、陶磁器D期(12世紀中頃～後半)の範疇で捉えたい。ただし、これまで検出されている龍泉窯系青磁椀I-1類を含む墳墓の多くは、12世紀後半から13世紀前半に中心があり、この墳墓も概ねこの時期に捉えて差し支えなかろう。

4ST030

出土した土師器坏a・小皿aの底部切り離し状況の確認できるものは、糸切りの小皿a1点のみである。おそらくは他の資料も同様の切り離しと考えると、それぞれの法量からXVI期(12世紀末～13世紀前半)に推測され、造墓時期が窺える。

4ST055

出土した土師器坏a、小皿aのうち底部切り離し状況が確認できる5点全てが糸切りであること、坏aが口径13.9cmとやや大きいが、小皿aが口径8.1～8.9cmとややばらつきがみられることから、土器の示す年代はXVI～XVII期(12世紀末～13世紀中頃)と推測され、造墓時期が窺える。

土壙墓

4ST001・045

出土遺物は埋土に混じって細かい土師器片が検出されたのみで、時期決定は困難である。ただ今回検出した墳墓群が互いに関連性の強いものとすると、それらの造墓時期の範囲内に納まるものと考えておきたい。

4ST025

出土した土師器坏a・小皿aのすべてに風化が目立ち、底部切り離しの状況は分からない。したがって法量のみから検討すると坏aが平均12.5cm、小皿aが平均約7.7cmであることから、造墓時期はXX期(14世紀前半)前後と推測される。

溝

4SD012

白磁皿IX類や龍泉窯系青磁椀I-5-b類などを含むが、造成等の改変が多い土地のため時期を絞り込むことは難しく、中世頃の埋没としておくのが妥当と考えられる。

4SD032

出土遺物からXVII～XIX期(13世紀中頃～13世紀末前後)と考えられる。表土除去時点で、この溝は2段目の平坦面の下に潜るような状況であったことから、2段目造成時には埋没していたと

考えられる。

4SD035

出土遺物から鎌倉時代に埋没した溝と推測される。これらSD032・SD035のような溝は、段造成を行っている丘陵の法面下によく検出されることから、段造成に伴うものと考えられる。

土坑

4SK006

坏aの法量が復元口径13.1～13.6cm、器高2.4～2.9cm、底径8.8～9.9cmを測ることから、埋没時期はXVI～XVII期（12世紀末～13世紀中頃）と考えられる。

4SK017

埋没時期は遺物が出土していないため、明確なことは分からないが、すぐ横の4SD035が鎌倉期には埋没していることから、それを前後する時期と推測される。

4SK018

白磁皿IX類や龍泉窯系青磁椀I-5-b類などを含む4SD012の下層に位置するため、これらの時期（13世紀末～14世紀初頭）より古いものと考えたいが、この調査地が全体的に崩壊や段造成による改変が著しいことやこの堆積層の遺物もかなり時期幅があることから時期を特定することは困難である。

4SK021

川原石に混じって土師器坏ｂが1点出土したが、盗難にあったため詳細は不明である。

火葬施設

4SX050

この遺構に直接関係するような遺物は見つかっていないが、時期は中世と考えられる。

谷状遺構

4SX060

2本のトレンチでは下層から遺物が殆ど検出されなかったことから、この谷が形成された時期については特定できない。その後谷部分に造られた4ST005を切る崩落が起こっている。まとまって検出された4SX013・040の遺物は、この谷部分に切り込んで造られた墓に供献されていたものと考えられ、4SX013出土の土師器坏aと小皿aは法量からXVII期（13世紀前半～中頃）、4SX040出土の白磁皿IX-2類と龍泉窯系青磁椀I-5-b類はおよそ13世紀後半～14世紀前半と考えられ、谷の崩落によって切られた4ST005の造墓時期がXIV～XV期（12世紀中頃～後半）以降であることから、12世紀にはすでに谷状遺構は埋没し、14世紀以降に谷部分が一部崩落したものと考えられる。また、1・2段目法面下で検出された4SD012が谷状遺構付近で途切れていること、4SD032・035が谷状遺構を挟んで検出されていることから、この部分には何らかの要因（周囲より高低差があった等）によって溝が存在しなかったもしくは削平された可能性も考えられる。

段造成

段造成の時期であるが、各段毎にみていくと1段目については平坦面西斜面際に位置する4ST005

が12世紀中頃～後半に造られ、平坦面奥側の4ST030が12世紀末～13世紀前半に造られていることから、12世紀後半頃には現状に近い平坦面に造成されたと考えられる。また、4ST005が斜面際に位置することから1段目は現状より西側にやや広かったと考えられる。2段目は1段目を削り落とし、赤茶色土で3段目の4SD032を埋め、平坦面を作り出しているため、13世紀中頃～14世紀前半の造成と考えられる。3段目は12世紀末～13世紀中頃には4ST055が造られ、段造成に伴って掘られたと考えられる法面下の4SD032や4SD035が鎌倉期には埋没していること、上述したように2段目の造成によって一部整地を受けていることなどから、2段目より古く1段目と差ほど遅れることなく造成されたと考えられる。4・6段目については遺構が展開していないため、造墓のための造成というより畑等の開墾によるものではないかと推測される。5段目は火葬施設が造られているほかは遺構が確認されていないため、造成は火葬施設の築造時期と考えられる。7段目は焼土壙が西斜面際にあり、他に遺構はみられないことから焼土壙の周囲以外はその後の開墾による平坦面の可能性も考えられる。

以上のように各段とも造成時期が微妙に異なることが推定された。また、1段目には改葬の痕跡や石積み（調査区外）、丘陵上方から転落したと思われる江戸末期の文久年間の墓石等があることから、近世以降、この丘陵西斜面の1段目は南斜面と同じく墓地として利用された様子が窺えた。その他の段については地権者等の話から畑地として利用されていたようである。

(2) 墳墓について

今回の調査において6基の土葬墓（木棺墓、土壙墓が混在するためまとめて土葬墓と称しておく）が検出された。その造営の時期は供献された土器群から、概ね12世紀後半から14世紀前半までの間と考えられ、近接した場所に累代的に埋葬されたのではないかと考えられる。各被葬者間に血縁関係が存在したかどうかは解明できないが、狭い範囲のしかも同一斜面を利用した造墓には、これらの墳墓（被葬者）間に強いつながりがあったであろうことは容易に想像され、ここではある一族の墓地として捉えることとしたい。

さて、この遺跡において注意される項目として、その立地と葬法が揚げられる。まず立地ではすべてが丘陵の斜面上位に位置すること、さらにこれらの墳墓を造営するに先だって丘陵斜面を段造成している可能性の強いことが指摘できる。また葬法ではすべてが略北側に頭位を置くとみられる土葬墓であり、複数が群集して営まれている点も注意しなければならない項目として取り上げたい。

そこで本稿では、太宰府市でこれまで検出されている当該期の墳墓を中心に、上記した項目を中心として関連資料を眺め、馬場遺跡出土墳墓が提示する課題を抽出してみたい。

A）12世紀後半から13世紀中頃の墳墓

市内で検出された当該期の墳墓はこれまで13基が確認されている（Tab.2、馬場遺跡を除く）。

これらの墳墓はすべて土葬墓で、複数の墳墓が群集することはなく単独あるいは2基程度の墳墓が存在する程度である。また、博多遺跡群や大宰府条坊跡に代表されるようにその多くは平地に

Tab.2　太宰府市内検出の12～13世紀の土葬墓一覧表

	遺跡名	遺構名	時期	棺例	碗形態	坏形態	小皿形態	その他の出土品	文献
1	君ヶ畑遺跡	25号墓	12c代	木棺墓	白IV (1)				A
2	君ヶ畑遺跡	6号墓	12c後～	木棺墓	白VIII (1)		土a (5)		A
3	大宰府史跡	SX863	12c後	木棺墓	白V (1) 瓦c (1)	土a (1)	土a (8)	刀子 (1) 銅銭 (1)	B
4	大宰府史跡	SX864	12c後	木棺墓	龍I-2 (1)	土a (1)			B
5	大宰府条坊跡	93ST040	12c後	木棺墓	龍II (1)	土a (1)	土a (4)	白皿 (1)	C
6	大宰府史跡	SX629	12c後～13c前	木棺墓	龍I-4 (1)		土a (4)		D
7	原遺跡	3ST160	12c後～13c前	木棺墓	龍I-2 (2)	土a (2)	土a (3)	白皿 (1) 土大皿c (1) 紡錘	E
8	大宰府条坊跡	50ST320	12c後	木棺墓		龍皿I (2)	土a (10)	手箱 (1) 鏡 (1) 青白水注 (1) 同皿I (1) 他	F
9	大宰府条坊跡	64ST130	12c後～13c前	木棺墓	龍I-2(1)	土a (1)	土a (5)		C
10	大宰府条坊跡	64ST145	12c後～13c前	木棺墓	同I (1)	土a (3)	土a (5)	刀子 (1)	C
11	大宰府条坊跡	66ST005	12c後～13c前	木棺墓	白V (1)		土a (3)	小刀 (1)	E
12	大宰府条坊跡	71ST400	12c後～13c前	木棺墓	龍I-2 (1)		土a (9)	青白磁合子 (1) ガラス玉	E
13	筑前国分寺跡	SX065	13c前～中	木棺墓		土a (1)	土a (8)		G

立地している。これらの墳墓に副葬または供献される品々もきわめて近似しており、特に供献用として墳墓に埋納された土器群のあり方は、その数量に違いが見出せるものの碗形態に陶磁器（青磁もしくは白磁）を用い、それに土師器の坏及び小皿を組み合わせるものである。

こうした形態を有する墳墓は近畿地方では屋敷地の一角に位置することが多く、当該屋敷成立段階近くに造営された「屋敷墓」として捉えられている(1)。福岡県内では屋敷墓としての確実な類例は、朝倉町の才田遺跡(2)にある程度で、他の資料はその条件を十分に備えたものとは言えない。これは博多遺跡群では層位の捉え方が困難な上に調査面積が個々ではきわめて狭く、当時の屋敷地のどの部分に墳墓が位置していたのか明確には押さえられない点が揚げられよう。しかし博多の場合、墳墓と同時期ないしはその前後の遺構や遺物が同じ調査区あるいは周辺の地点で検出されていることから、調査や研究がより進展し、博多の宅地割りが明確になるならば屋敷墓として位置づけられる資料も含まれているものと考えられる。

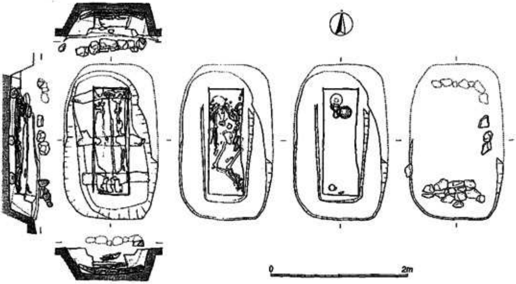


Fig.33　大宰府史跡SX863

これに対して大宰府では、立地の上では共通するが選地の上では宅地内に存在しているとは言い切れない状況を呈している。これに対する明確な回答は持ち合わせていないが、周辺の遺構の終焉時期ときわめて近接していることや、13世紀に入ると観世音寺周辺から東側に集落（町並み）の中心が移動することが判明しており、屋敷墓造営の思想が大宰府に流入した直後に、何らかの要因（官庁としての大宰府の廃絶が大きな要因か）でその屋敷の主体者が移動もしくはきわめて小さな勢力にまで衰えたことが窺え、大宰府に集住した人々の階層が様変わりする時期と符合していることから、後続する家主がその土地を放棄せざるを得なかった社会的事情が存在するものと見られる。

ところでこの時期の供献形態のあり方は、陶磁器こそ埋納しないがこれ以前の時期の墳墓にみられる土器相にその源流を求め得るものと言え、少なくとも9世紀代までは遡ることが可能であろう[3]。しかしその立地は9世紀から10世紀後半あたりまでは丘陵の中位もしくは裾部分に展開し、数基程度が群集して一つの墓域を形成する傾向にあり、立地の点では大きな異なりを見せている。

以上をまとめてみると、当該期の墳墓は土葬という従来の葬法や供献形態を受け継いだ墓制（埋葬に至るプロセスが古い形態）であることが理解できるものの、埋葬地が平地に移行し、しかも宅地内もしくはその周辺部に単独もしくは少数で埋葬されるのが一般的な形態であったといえよう[4]。

B）13世紀後半以降の墳墓

太宰府市及びその周辺では近年になっていくつかの事例が調査されるに至り、その様相がおぼろげながら見えつつある。市内では五条遺跡第2次調査地点、宝満山遺跡群第12次調査地点等がある。いずれも13世紀後半から14世紀代の墳墓で、五条遺跡では平野部を直接眺めることのできる丘陵の頂上部を段造成し、そこに略方形の配石墓を群集して造営するものである。一部の墳墓では五輪塔（石造及び陶製）を標識としており、埋葬方法の主体は火葬である[5]。宝満山遺跡の例では標識が自然石となるものの、同様の配石を行っており葬法はやはり火葬である[6]。

また、ほぼ同時期とみられる資料には推定金光寺跡墳墓群[7]があり、中世在地領主の居館跡とみられる一角に三昧堂と思しき平面正方形の建物（SB1600）があり、その背後（西側）に五輪塔や板碑を伴った火葬墳墓が造営されている。これに類似する例が横岳遺跡でも最近確認されている[8]。また三昧堂とみられる遺構は、大宰府学校院跡でも調査されており[9]、14世紀前後の葬制を考える上で重要な所見を提示しつつある。

さて、北部九州を見渡した場合、遠賀川以東に良好な資料の発見例が多く、白岩西遺跡[10]はその代表的なものである。ここでは丘陵の大半を段造成し、そこに13世紀後半から16世紀に至る配石墓（火葬墓）の群集する状況が看取される。さらに佐賀県でも霊仙寺跡で火葬墳墓が多数確認されている[11]。

このようにこの時期の墳墓の特徴は、丘陵部に主体的に造営され、しかも段造成を伴うものが多く、当初から丘陵部の多くの範囲を一族？の墓域に設定し、そこに配石墓を中心とした火葬墓が群集する傾向にあると言える。この状況は本州の中央部以西ではかなり普遍的にみられるもの

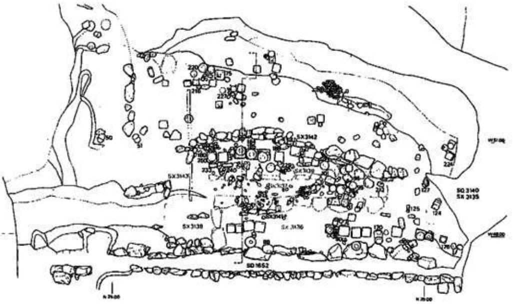


Fig.34　推定金光寺跡検出の墳墓群

であり、13世紀後半から14世紀にかけての時期にわが国の墓制が大きく変化したことを示している。

以上のように、大宰府周辺における古代末から中世の墳墓は大きく2つの形態に分けられることがわかる。ひとつは従来からの伝統を汲む葬法で且つ供献形態が近似する土葬墓の存在である。これらは群集することなく、単独あるいは2基程度が寄り添うように営まれることを常とし、しかも平地でかつ住宅が営まれていたエリア内に構築されるものである。いまひとつは火葬という遺体処理方法を用い、拾骨から蔵骨への行為を伴ったのち配石を行って一定の墓域を明確にした上で群集して構築され、立地を丘陵頂部から斜面上位にかけて求めるものである。大きく異なるこれら二つの形態は13世紀後半を前後する時期に変化し、墳墓の変遷を考える上で大きな画期として位置付けることができる。

さて、こうした観点から馬場遺跡第4次調査地点を見ると、立地の点で13世紀後半以降の様相を呈しながらも、葬法や供献形態ではそれ以前の伝統的流れの中に位置付けることができ、両者が混在した形で成立していることがわかる。時期的にもこれらに跨って位置するものであり、葬法や立地が変化する過渡期の資料として位置付けられるものと考えられる。これは葬法と立地が同時に変化したことを否定するものであり、何らかの要因でまず従来の立地に制約が加えられ、伝統的な立地を変更せざるを得なくなったことによるものと推定できる。そしてその後に葬法がまったく別の要因で急激に変化し、立地を踏襲して典型的な中世墓地に至るものと考えられよう。

こうした状況が見いだされる要因は単に宗教的背景に留まるものではなく、政治的な要因が関係していることを予想させるものであるが、ここでは課題の抽出に留め、これ以上の検討は別の機会に譲りたい。

（註）

(1) 橋田正徳「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究VII』1991　日本中世土器研究会

(2) 伊崎俊秋『九州横断自動車道埋蔵文化財調査報告-48-』1998　福岡県教育委員会

(3) 拙稿「古代都市大宰府の検討－墳墓からのアプローチ－」『古文化談叢』23号　1990　九州古文化研究会

拙稿「墳墓に見る供献形態の変遷」『貿易陶磁研究』NO.13　1993　日本貿易陶磁研究会

なお、8世紀代の火葬主流の時期を除けば、さらにその系譜は古墳時代の土壙墓などに供献される土器相に通じるものがある。火葬から土葬に帰納するとき、従来の祭祀形態がそのまま引き継がれたとは考えられないだろうか。

(4) こうした点を重視するとこの段階では未だ葬法ないしは供献形態においては古代を引きずっているという感じがする。大宰府政庁の廃絶が遺跡の上では11世紀後半を示し、それに呼応するように前面に広がる都市遺跡（大宰府条坊跡）の区画溝は11世紀後半から12世紀前半にかけてその多くが埋没し機能を失っている。政治的な面ではここが古代の終焉とでも言えそうである。さらに近年の土器研究では10世紀後半を境に土器相が大きく変化するという指摘があり、これ以降を中世的な土器様相と考える意見も少なくない。人間の「生」の部分はすでに中世でありながら、「死」に関わる伝統儀礼的な祭祀行為は未だ古代的と言わざるを得ない。人間の内面に潜む精神文化は、その表面に現れる文化現象と必ずしも同一の動きを示すわけではないことを物語る事例を言えよう。

(5) 平成6年度太宰府市教育委員会調査（調査担当：城戸康利）

(6) 山村信榮『宝満山遺跡群II』（太宰府市の文化財第34集）1997　太宰府市教育委員会

(7) 石松好雄ほか『大宰府史跡-昭和62年度発掘調査概報-』1988　九州歴史資料館

(8) 平成10年度太宰府市教育委員会調査（調査担当：中島恒次郎）

(9) 石松好雄ほか『大宰府史跡-昭和51年度発掘調査概報-』1977　九州歴史資料館

(10) 川上秀秋ほか『白岩西遺跡』1985　（財）北九州市教育文化事業団

(11) 田平徳栄ほか『霊仙寺跡』1980　東脊振村教育委員会

（Tab.2文献）

A）前川威洋ほか『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第７集』1977　福岡県教育委員会

B）石松好雄ほか『大宰府史跡—昭和51年度発掘調査概報—』1977　九州歴史資料館

C）狭川真一『大宰府条坊跡X』（太宰府市の文化財第37集）1998　太宰府市教育委員会

D）石松好雄ほか『大宰府史跡－昭和50年度発掘調査概報－』1976　九州歴史資料館

E）狭川真一「墳墓とその遺物」『太宰府市史－考古資料編－』1992　太宰府市

F）山本信夫・狭川真一『大宰府条坊跡XI』（太宰府市の文化財第42集）1998　太宰府市教育委員会

G）森田勉『筑前国分寺－昭和52年度発掘調査概要－』1978　福岡県教育委員会

Tab.3　馬場遺跡第4次調査遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	時期	地区
1	ST001	土壙墓	平安～鎌倉	1段
2	SK002	改葬後の土壙　　S-30→S-2	近代？	1段
3		土壙	平安～鎌倉	1段
4		ピット群	近代	3段
5	ST005	木棺墓	XIV～XVI期	1段
6	SK006	土壙	XVI～XVII期	3段
7	SK007	ピット群	XX期	3段
8		ピット群	XIII期以降	3段
9		土壙		1段
10		土壙	平安～鎌倉	1段
11		土壙		1段
12	SD012	溝	中世	2段
13	SX013	陶磁器等出土地点	XVII期	3段
14		ピット群	中世以降	3段
15		土壙	XIII期以降	1段
16		土壙	中世	3段
17	SK017	土壙	中世	3段
18	SK018	土壙　　S-18→S-12	中世	2段
19		土壙	XIII期以降	3段
20	SX020	焼土		1段
21	SK021	土壙	中世	3段
22		土壙群	近世以降	3段
23		土壙群	近世	3段
24		焼土　　S-50の残骸	中世	5段
25	ST025	土壙墓	XX期	1段
26		土壙群	近世以降	3段
27		ピット群	近世以降	7段
28		ピット群		6段
29		ピット群	中世	
30	ST030	木棺墓	XVI期	1段
31	SX031	焼土壙	中世	7段
32	SD032	溝	XVII～XIX期	3段
35	SD035	溝	鎌倉	3段
40	SX040	陶磁器出土地点	XVIII～XX期	2段
45	ST045	土壙墓	平安～鎌倉	3段
50	SX050	火葬施設	中世	5段
55	ST055	木棺墓	XVI～XVII期	3段
60	SX060	谷状遺構	12世紀以前	1段～8段

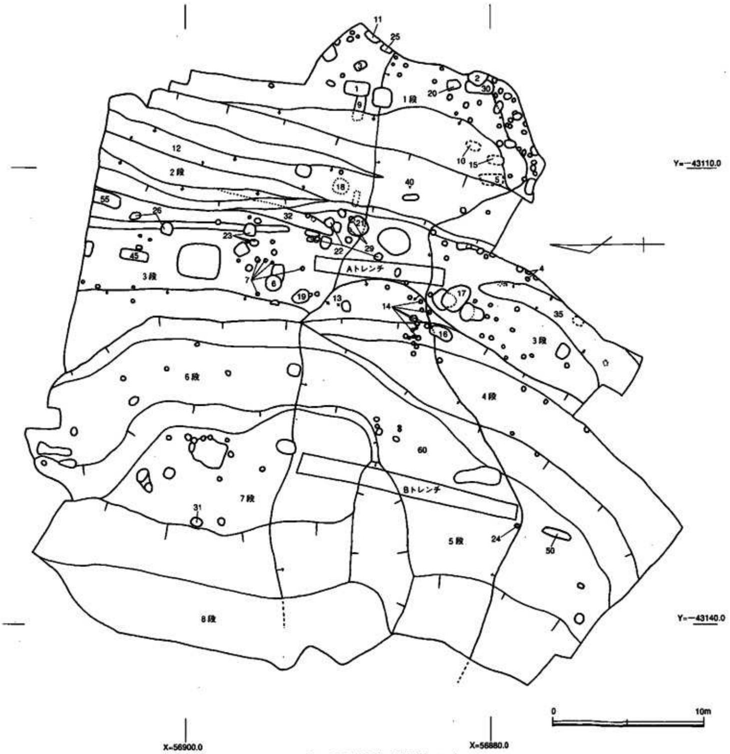


Fig.35　第4次調査遺構略測図（1/250）

Tab.4　馬場遺跡第4次調査出土遺物一覧表

S-1

土師器	坏a、小皿a
須恵質土器	鉢
白磁	破片
中国陶器	水注片、壺×水注
金属製品	鉱滓

S-2

須恵器	甕
土師器	擂鉢
須恵質土器	鉢
瓦質土器	火舎
肥前系陶磁器	碗
瓦類	破片

S-3

土師器	破片

S-4

国産磁器	碗(近代)
瓦類	平瓦(近代)

S-5

土師器	坏片
龍泉窯系青磁	I-1a、1

S-6

土師器	坏a、小皿a(イト)
龍泉窯系青磁	碗；I-5b、壺？
国産陶器	甕？
金属製品	鉱滓

S-7

土師器	坏a、小皿a、鉢
同安窯系青磁	碗；I-1a

S-8

土師器	小皿a(イト)、煮沸具
瓦質土器	擂鉢
青白磁	破片

S-10

土師器	破片

S-11

土師器	破片
国産陶器	破片

S-12

土師器	破片
龍泉窯系青磁	碗；I-5b
瓦質土器	擂鉢
国産磁器	破片
白磁	皿；IX
染付（輸入）	碗(明代)
中国陶器	壺片
土製品	人形
石製品	焼け石、滑石片
瓦類	丸瓦、破片

S-13

龍泉窯系青磁	碗；I-1c

S-14

土師器	坏a、小皿a、
白磁	碗；IV～VIII

S-15

土師器	坏a(イト？)

S-16

土師器	破片
瓦器	碗
龍泉窯系青磁	碗；I-5
同安窯系青磁	皿；I
金属製品	鉱滓
石製品	滑石片

S-17

土製品	焼土塊

S-18

土師器	鉢
瓦質土器	火舎？
中国陶器	破片

S-19

土師器	坏a(イト)

S-22

土師器	坏、小皿a
肥前系陶磁器	碗
国産磁器	色絵

S-23

土師器	小皿a
瓦質土器	鉢
国産陶器	破片
青白磁	破片
中国陶器	盤
肥前系陶磁器	筒茶碗
瓦類	破片

S-25

土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)

S-26

瓦類	破片（新）

S-27

土師器	坏
肥前系陶磁器	碗？

S-28

土師器	坏a

S-29

土師器	坏a、小皿a

S-30

土師器	小皿a（イト）
青白磁	碗

S-31

土師器	坏a（イト）、小皿a（イト）

S-32

土師器	坏a
龍泉窯系青磁	碗；I
	坏；III-1
須恵質土器	甕
国産陶器	破片
白磁	碗；II、IV～VIII
	皿；VI-1
石製品	焼け石
瓦類	瓦玉

S-35

土師器	坏a（イト）、小皿a（イト）、鍋
龍泉窯系青磁	碗；I？
同安窯系青磁	碗；I-1a
中国陶器	破片
白磁	碗；IV～VIII
石製品	焼け石、滑石片、五輪塔空風輪
金属製品	鉱滓
土製品	焼土塊

S-40

龍泉窯系青磁	碗；I-5b
白磁	皿；IX-2

S-45

土師器	破片

S-50

須恵器	甕
土師器	坏、小皿a、鍋
須恵質土器	鍋
土製品	焼土塊
石製品	焼け石
瓦類	軒丸瓦

S-55

土師器	坏a（イト）、小皿a（イト）

S-60

須恵器	甕
土師器	坏a、小皿a、鍋、鉢
龍泉窯系青磁	碗；I、I-5b、III-3、III、上田分類DI×II
	皿；I
同安窯系青磁	碗；I-1b、破片
	皿；I-1b、I
青磁	内面陰絵文、口禿げ、破片
須恵質土器	鉢（東播系）、鉢
瓦質土器	擂り鉢、鉢、火鉢
国産陶器	常滑甕
白磁	碗；IV、IV-1a、V、V3×4
	皿；IX、IX-1、IX-2
	壺×水注、壺破片
中国陶器	壺；褐釉
輸入陶磁器	陶器甕、壺
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
石製品	焼け石、鍋片
瓦類	平瓦（二重格子）、丸瓦（二重格子）、瓦玉
その他	ガラス玉

S-60Aトレンチ

土師器	破片

S-60Bトレンチ

土師器	坏a、小皿a
白磁	碗；IV
瓦類	破片（縄目）

1段目灰茶色土

土師器	坏a、小皿a
龍泉窯系青磁	碗；I、I-4、I-5b、I-2～I-4、III
同安窯系青磁	碗；I
瓦質土器	鉢（東播系？）、鉢
国産陶器	行平、高取焼窯？
青磁	香炉
白磁	碗；IV～VIII、V-2×VII、段2
	皿；IX、IX-1
	その他；合子、破片
青白磁	破片
中国陶器	壺IV-1、壺破片、天目碗、陶器破片
国産磁器	近代以降多数あり
輸入陶磁器	壺？
土製品	仏像、メンコ
石製品	砥石、滑石片
瓦類	破片、瓦玉

1段目灰色土

土師器	坏c
龍泉窯系青磁	碗；I-5b
同安窯系青磁	皿；I
白磁	碗；IV～VIII
土製品	焼土塊
瓦類	破片

2段目赤茶色土

土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
龍泉窯系青磁	椀；I
同安窯系青磁	皿；I
高麗青磁	破片(象嵌)
国産陶器	破片
白磁	皿；VI、IX
中国陶器	壺片？、甕、陶器破片
石製品	滑石片
瓦類	破片(格子)
その他	骨片

2段目暗灰色土

土師器	坏片、鍋？
龍泉窯系青磁	椀；I-5b
輸入陶磁器	磁器片
国産陶器	甕、破片（近代～）
白磁	椀；V-1×VIII-2
中国陶器	壺片
その他	骨片

2段目暗茶色土

須恵器	蓋1
土師器	椀c、坏
龍泉窯系青磁	椀；I、I-4
青磁	盤(内面蓮華文)、坏(内面クシ)
須恵質土器	鉢
瓦質土器	火舎
国産陶器	破片(内面底花文)、口縁部
白磁	椀；II、IV～VIII、V-2×VIII-1.3、IX、殿2、
	皿；VI、IX、椀II×皿II.III？
中国陶器	壺片、甕片、水注片
瓦類	破片

2段目灰茶色土

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、小皿a、小皿、鍋
龍泉窯系青磁	椀；I、I-4、I-5b、IV、IV7
	小椀；I
同安窯系青磁	椀；I-1b
須恵質土器	鉢(東播系)、甕(二次焼成あり)
瓦質土器	擂り鉢、火鉢、羽釜
白磁	椀；IV～VIII、V-1×VIII-2、IV、V-1、V-2、殿1、殿2
	皿；IX、破片
青白磁	合子
染付（輸入）	椀
中国陶器	壺片、鉢片、盤片、緑釉盤片、陶器破片
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
李朝	施釉陶器片
肥前系陶磁器	椀、皿？
国産磁器	近代多数
石製品	硯、焼け石、滑石片、石炭
瓦類	丸瓦、丸瓦(二重格子)、破片(格子)
その他	骨片

3段目灰茶色土

須恵器	甕(古代)、甕、坏
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、椀(11c)、鉢、鍋
龍泉窯系青磁	椀；I、I-1、I-4、I-5b、III、III-2、III-4、IV
	小椀I、坏III-2×3、壺？
同安窯系青磁	椀；I-1b
	皿；I-2b、I
青磁	破片
須恵質土器	鉢(東播系)、鉢
瓦質土器	擂り鉢、甕
国産陶器	破片
白磁	椀；II？、IV～VIII、V-2×VIII-1、IV、IV-1、IV-1a、
	V-殿2、内面櫛目、殿2
	皿；IX、IX-1、IX-2
	壺？
青白磁	合子蓋
中国陶器	四耳壺VI、壺片、甕片、盤片、盤II-2
肥前系陶磁器	破片
国産磁器	蕎麦猪口底、染付
金属製品	鉱滓
石製品	焼け石、滑石片、刃器
瓦類	破片、破片(新)
その他	ガラス瓶(現代)

3段目暗茶色土

須恵器	甕(中世？)
土師器	坏a、小皿a、小皿b、小皿c、鍋？
龍泉窯系青磁	椀；I-1、I-4、I-5b、IV
同安窯系青磁	椀；I-1a、内面櫛目
須恵質土器	鉢
白磁	椀；IV～VIII？、V-1、IV-1、VI-1b×V-4b
	皿；IX、IX-1
中国陶器	破片
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
石製品	焼け石、滑石片
瓦類	丸瓦

3段目赤茶色土

須恵器	蓋
土師器	坏a、小皿a、鍋？
龍泉窯系青磁	椀；I-4
同安窯系青磁	椀；I
白磁	椀；IV、IV～VIII
	皿；IX

3段目暗灰色土

須恵器	甕
土師器	坏a(ヘラ)、坏a(イト)、小皿a、鍋、甕？
龍泉窯系青磁	椀；I-4、I-5b、IV
同安窯系青磁	椀；I-1a、破片
青磁	破片
白磁	椀；IV-1、殿2
	皿；IX
中国陶器	破片
国産磁器	染付椀(現代)
石製品	滑石加工品
瓦類	平瓦(現代)

3段目明灰茶色土

土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、鍋?
龍泉窯系青磁	碗;I-2b、I-4、I-5b、III-2
同安窯系青磁	碗;I-1a、皿;I
瓦質土器	鉢
国産陶器	破片
白磁	碗;V-2b
	皿;VI-1、IX、IX-1
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
土製品	焼土塊
石製品	焼け石
瓦類	破片

4段目赤茶色土

土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
龍泉窯系青磁	碗;I、IV
白磁	破片
青白磁	瓶?
肥前系陶磁器	碗片
石製品	焼け石

4段目灰茶色土

土師器	坏a、小皿a
龍泉窯系青磁	碗;I、I-4、I-5b、IV
同安窯系青磁	碗;I
瓦質土器	鉢
国産陶器	破片
白磁	碗;VIII、破片
中国陶器	壺片
金属製品	銅片
石製品	焼け石、滑石
瓦類	破片、瓦玉

5段目灰茶色土

須恵器	坏
土師器	坏a、小皿a、椀c、鍋、羽釜?
龍泉窯系青磁	碗;I、I-4、I-5b、I-6、I-6b、III、IV
	坏;III-5b
瓦質土器	鉢
国産陶器	瓶、破片
白磁	碗;IV、IV～VIII
	皿;V-2×VIII-2、IX、IX-1a、碗×皿
	水注×壺II
青白磁	瓶
金属製品	鉱滓、鉄釘
石製品	焼け石、鍋片
瓦類	平瓦、瓦玉

5段目明茶色土

土師器	坏a、小皿a(イト)
龍泉窯系青磁	碗;I-5
須恵質土器	甕
瓦質土器	鉢
国産陶器	常滑甕
白磁	皿;IX
瓦類	平瓦(格子)

5段目淡灰色土

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、小皿b、坏c
龍泉窯系青磁	碗;I、I-4、I-5b、内面スタンプ
	小碗I-1、坏III-3a、盤III、III外面蓮弁、盤片
須恵質土器	鉢
白磁	碗;IV、IV-1、IV～VIII
	皿;VIII、IX、IX-1
中国陶器	四耳壷×水注
土製品	土錘、焼土塊
石製品	滑石片
その他	骨片

6段目灰茶色土

須恵器	甕
土師器	坏a、小皿a、小皿c、甕
龍泉窯系青磁	碗;I、I-5b、III、VIII-2
	坏;III-3a
同安窯系青磁	碗;I-1a
瓦質土器	鉢
国産陶器	破片(近世)、土瓶蓋
白磁	碗;IV～VIII、段2
	皿;I、II、IX
肥前系陶磁器	染付碗
国産磁器	破片(近世)
石製品	焼け石
瓦類	平瓦

7段目灰茶色土

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、坏c(イト?)、鍋、鉢
龍泉窯系青磁	碗;I、I-2～4、I-5b、III、III-3、破片
瓦質土器	擂り鉢、鉢
国産陶器	行平、破片
白磁	碗;IV、IV～VIII、V-2×VII、V-1?、IX、段2
	皿;VI×VII?、IX、壺片
肥前系陶磁器	筒茶碗、破片
国産磁器	破片多数(近代)
石製品	滑石片
瓦類	破片(近代)

8段目灰茶色土

須恵器	坏、甕
土師器	坏a、小皿a、鍋?
龍泉窯系青磁	碗;I、I-5b
同安窯系青磁	碗;I-1c
青磁	破片
灰釉陶器	碗片
国産陶器	軟質土器、破片(近世～近代)
白磁	碗;IV、IV-2a、VIII-1×3、IV～VIII、V-1×VIII-2、V
	V-2、V-4b×VI-1b×VII、段2
	皿;IX、V×VII、壺片
青白磁	合子蓋?
中国陶器	甕片、破片
肥前系陶磁器	碗、鉢、紅皿
国産磁器	破片多数(近代)
石製品	滑石片
瓦類	破片

表土

須恵器	甕3
土師器	坏a(イト)、坏a、坏a([illegible])、小皿a(イト)、小皿a
	鍋、甕
龍泉窯系青磁	碗；I、I-1、I-4、I-5b、IV、III
	小碗；I、I-1、III、蓮弁文
	皿；I、坏；III
同安窯系青磁	碗；I-1a、I-1b、皿片
青磁	皿
輸入陶磁器	破片
須恵質土器	甕
白磁	碗；IV、IV-2a、V、V？、V-4b、VI？、IV～VI、段2
	IV～VIII、V-2内面ヘラ×VIII、VIII-1～3、IX
	皿；V～VI？、VI、VI-1、IX、IX-1、IX-2、IX-1c
	その他；坏？、鉢VIII、合子身、蓋
中国陶器	甕片、小壺
肥前系陶磁器	破片
国産磁器	染付碗(現代)
石製品	剥片(黒曜石)
瓦類	平瓦(格子)、破片

Z

須恵器	甕
土師器	鉢
龍泉窯系青磁	碗；I、I-5b、I-6a
	皿；I-2×3
高麗青磁	碗片(内面象嵌)
白磁	碗；V、V-1×VIII-2、VII？
中国陶器	甕片
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦、平瓦(格子)

Tab.5　馬場遺跡第4次調査　土師器法量表

A.内底ナデの有無　　B.板状圧痕の有無

S-6

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
坏a	Fig.19-9	R-001	(13.6)	2.4	(9.9)	−	○
〃	19-10	R-002	(13.1)	2.9	(8.8)	−	○

S-7

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
小皿a	−	R-001	7.7	1.3	5.9	−	−

S-13

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
小皿a (イト)	Fig.20-1	R-003	(8.6)	1.15	6.6	−	○
〃 〃	20-2	R-004	(8.3)	1.1	(6.4)	○	−
〃 〃	20-3	R-005	8.4	1.05	7.0	○	−
坏a 〃	20-4	R-002	13.3	2.75	9.5	−	○

S-25

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
小皿a	Fig.17-2	R-002	7.75	1.4	6.1	−	○
〃	17-3	R-003	7.9	1.35	6.3	−	○
〃	17-4	R-005	7.3	1.15	6.0	−	−
〃	17-5	R-006	7.8	1.45	6.1	−	−
坏a	17-6	R-001	12.6	2.8	8.5	−	−
〃	17-7	R-004	12.4	2.6	8.1	−	−

S-30

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
小皿a (イト)	Fig.14-2	R-003	8.9	1.15	7.5	○	−
〃	14-3	R-004	9.2	0.95	7.6	−	−
〃	14-4	R-005	(8.6)	1.0	(7.3)	−	−
坏a	14-5	R-002	(14.4)	2.9	(10.3)	−	○

S-35

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
小皿a	Fig.19-4	R-001	(8.2)	0.95	5.8	−	−

S-55

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
小皿a (イト)	Fig.14-7	R-002	8.3	0.75	7.3	−	−
〃 〃	14-8	R-003	8.1	0.85	6.7	−	−
〃 〃	14-9	R-004	8.5	0.8	7.0	−	−
〃	14-10	R-005	8.2	0.8	7.4	−	−
〃 (イト)	14-11	R-006	8.9	1.0	7.0	−	−
坏a 〃	14-12	R-001	13.9	3.0	9.6	×	×

S-60

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
小皿a (イト)	Fig.21-1	R-004	(7.2)	(1.2)	(6.0)		
小皿b 〃	21-2	R-001	(7.5)	(1.65)	(5.8)		

2段目灰茶色土

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
小皿	Fig.25-1	R-006	(17.0)	1.3	(4.2)		

3段目赤茶色土

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
坏a	Fig.27-1	R-001	13.5	2.6	9.2	−	−
〃	27-2	R-002	(13.6)	2.3	(10.2)	−	−

3段目暗灰色土

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
坏a	Fig.27-3	R-001	11.2	2.45	7.6		

3段目灰茶色土

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
小皿a (イト)	Fig.27-4	R-001	7.7	1.0	6.1	−	○

5段目灰茶色土

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
小皿a	Fig.29-3	R-001	(8.5)	2.4	(5.8)		

表土

器種	図版番号	R-	口径	器高	底径	A	B
小皿	Fig.32-1	R-002	−	−	(5.5)		

(単位 cm)

Tab.6 馬場遺跡第4次調査　鉄製釘計測表

C：木質変化点から上端までの計測値
D：木質向き（a. 直交　b. 交差）

4ST005

図版番号	R番号	長さ	最大幅	C	D
Fig.15-13	R-013	6.4	0.65	2.3	a
15-14	R-014	6.8+	0.8	3.1	a
15-15	R-015	4.4+	0.65		
15-16	R-011	4.9+	0.6	1.6	a
15-17	R-004	4.5+	0.65		a
15-18	R-016	4.35+	0.5	1.1+	a
15-19	R-010	4.85+	0.65		
15-20	R-007	4.4+	0.45		a
15-21	R-009	4.85+	0.65	1.6	a
15-22	R-006	4.75+	0.6		
15-23	R-012	3.0+	0.65	3.0+	
15-24	R-002	3.3+	0.85	3.3+	
15-25	R-003	2.6+	0.55		
15-26	R-005	1.9+	0.45		
15-27	R-018	1.7+	0.45		
15-28	R-008	2.3+	0.4		
15-29	R-017	1.1+	0.4		

4ST030

図版番号	R番号	長さ	最大幅	C	D
Fig.15-30	R-012	6.9	0.7	2.6	a
15-31	R-007	6.1+	0.65	2.1+	a
15-32	R-006	4.5+	0.5	0.6+	a
15-33	R-009	3.35+	0.6	2.0+	a
15-34	R-008	3.3+	0.4	2.1	a
15-35	R-011	1.9+	0.4		
15-36	R-010	2.2+	0.55		

5段灰茶色土

図版番号	R番号	長さ	最大幅	C	D
Fig.30-11	R-006	6.6+	1		
30-12	R-007	4.0+	0.6		

4ST055

図版番号	R番号	長さ	最大幅	C	D
Fig.16-37	R-035	5.6	0.55	2.5	a
16-38	R-008	5.1+	0.5	0.4+	a
16-39	R-036	3.9+	0.35	0.4+	a
16-40	R-034	4.2+	0.55	2.2	a
16-41	R-011	5.0+	0.45	1.9	a
16-42	R-026	4.1+	0.6	2.5	a
16-43	R-031	4.0+	0.5		
16-44	R-014	3.3+	0.5	1.5	b
16-45	R-012	4.25+	0.4	2.3	a
16-46	R-022	4.7+	0.3		
—	R-023	2.35+	0.3		
16-47	R-024	3.0+	0.45	1.25+	b
16-48	R-037	3.2+	0.4		
16-49	R-013	2.45+	0.6	2.45+	
16-50	R-010	2.6+	0.5	1.7	a
16-51	R-032	2.5+	0.65		
16-52	R-030	2.3+	0.6	2.3+	a
16-53	R-018	2.7+	0.4		
16-54	R-033	2.55+	0.55		
16-55	R-020	1.9+	0.4	1.9+	
16-56	R-027	1.85+	0.45		
16-57	R-015	1.75+	0.4		
16-58	R-029	1.4+	0.6		
16-59	R-019	1.15+	0.5	1.15+	
16-60	R-021	1.5+	0.35	1.8+	
16-61	R-028	1.5+	0.5		
16-62	R-025	3.1+	0.35		
16-63	R-039	1.2+	0.25		
16-64	R-016	1.2+	0.35		
16-65	R-038	1.3+	0.45		
16-66	R-007	1.1+	0.5		
16-67	R-017	1.6+	0.4		
16-68	R-009	1.05+	0.5	0.5+	a

（単位　cm）

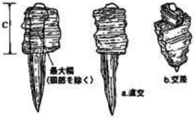


Fig.36　鉄製釘観察模式図

写真図版

Pla.1

第4次調査全景（西から・空中写真）

Pla.2

第4次調査全景（北西から・空中写真）

第4次調査1段～6段目状況（西から・空中写真）

Pla.3

第4次調査前状況（北から）

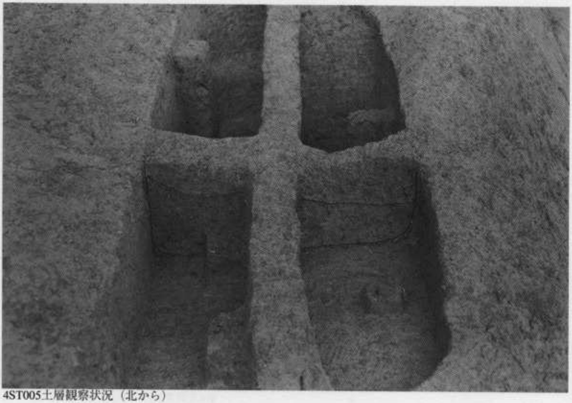
第4次調査丘陵遠景（東から）

第4次調査伐採後状況（北西から）

第4次調査伐採後状況（3～5段、北から）

Pla.5

4ST005土層観察状況（東から）

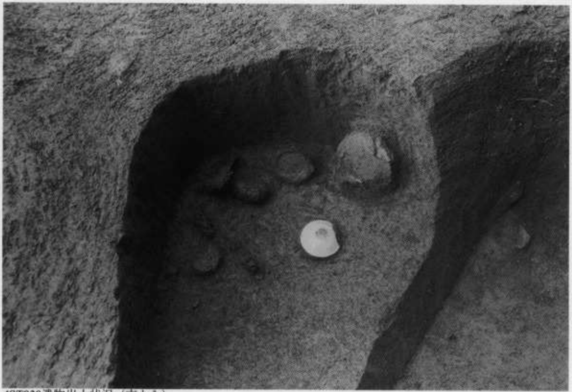


4ST005土層観察状況（北から）

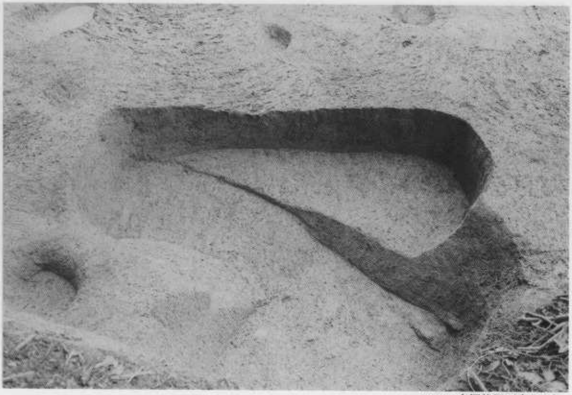
4ST005遺物出土状況（南から）

4ST005完掘状況（東から）

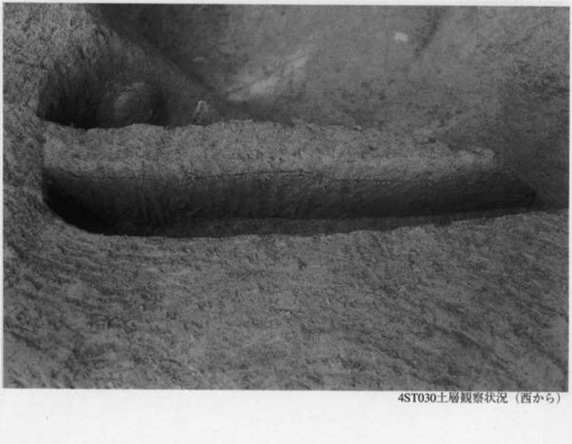
4ST030遺物出土状況（東から）



4ST030遺物出土状況（南から）



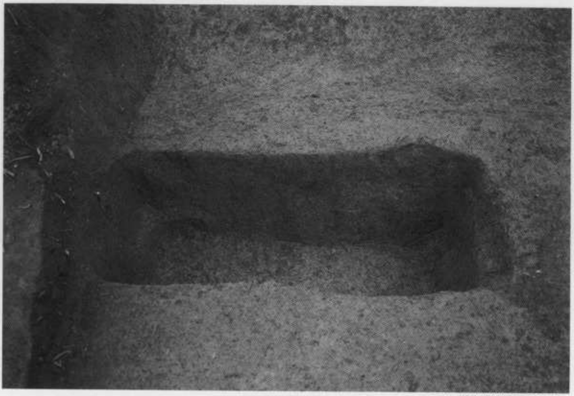
4ST030完掘状況（東から）



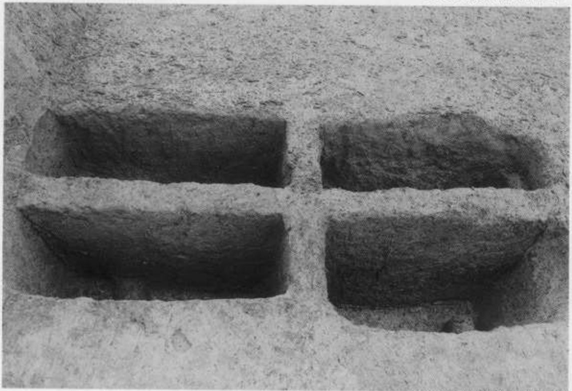
4ST030土層観察状況（西から）

4ST055遺物出土状況（西から）

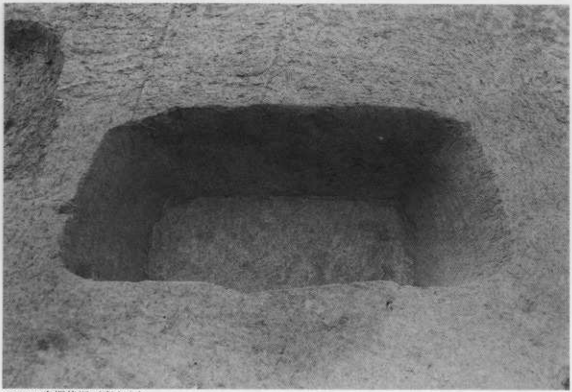
4ST055遺物出土状況（西から）



4ST055完掘状況（西から）



4ST055土層観察状況（西から）



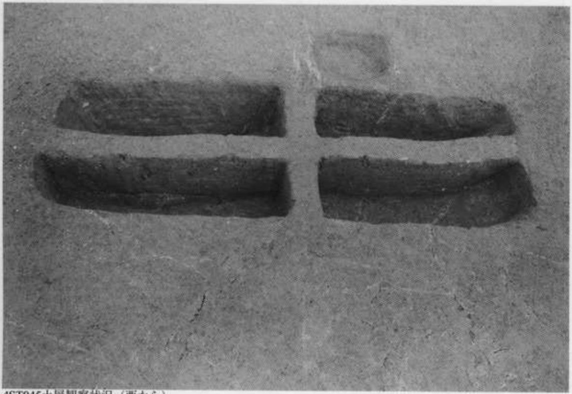
4ST001完掘状況（東から）

4ST001土層観察状況（南から）

4ST025遺物出土状況（西から）

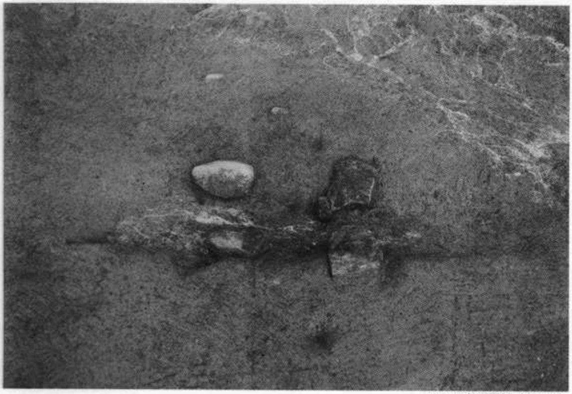
4ST025土層観察状況（西から）

4ST045完掘状況（西から）



4ST045土層観察状況（西から）

4SX050検出状況（西から）

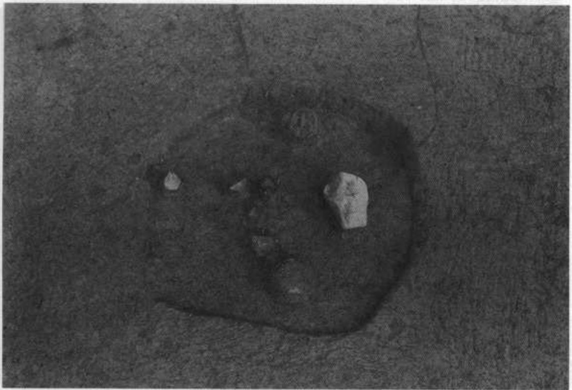


4SX050完掘状況（西から）

4SX050土層観察状況（東から）

4SX050土層観察状況（南から）

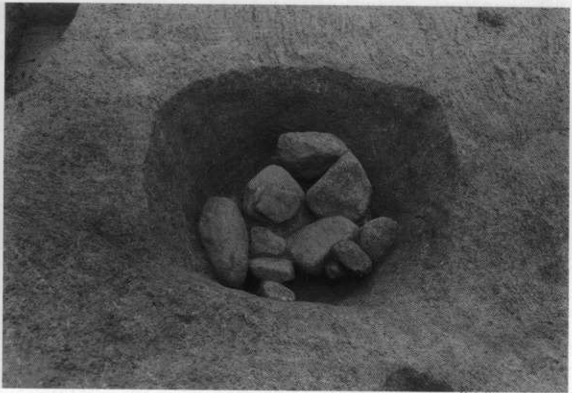
4SD035土層観察状況（南から）



4SK006遺物出土状況（西から）

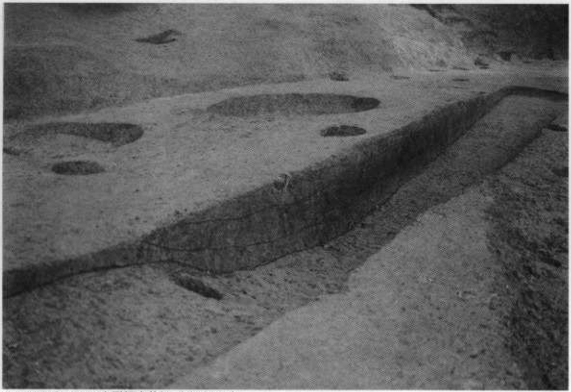
4SK017土層観察状況（北から）

4SK021検出状況（東から）

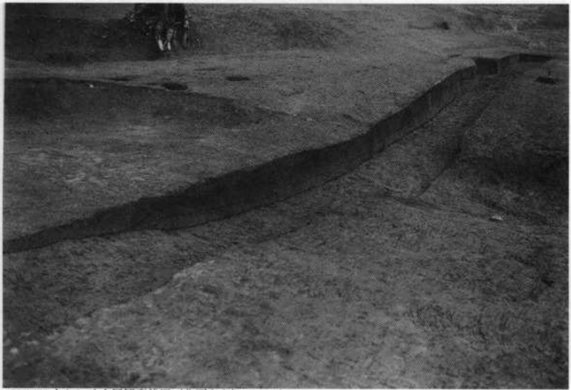


4SK018検出状況（東から）

4SK018土層観察状況（西から）

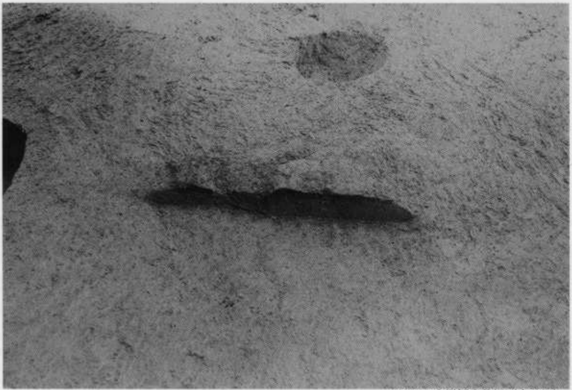


4SX060Aトレンチ土層観察状況（北西から）

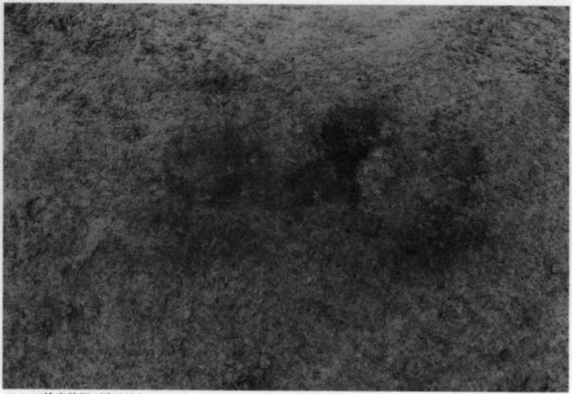


4SX060Bトレンチ土層観察状況（北西から）

4SX020検出状況（西から）



4SX020土層観察状況（東から）



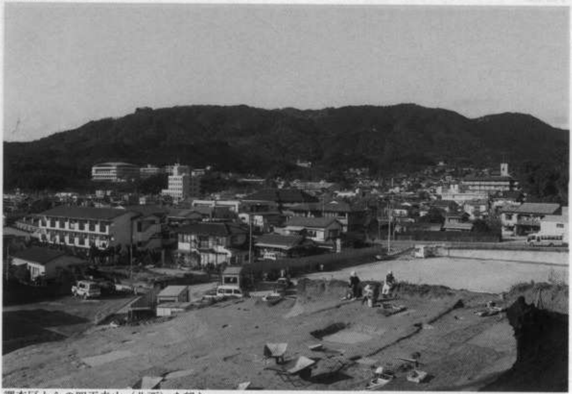
4SX031検出状況（東から）

4SX031土層観察状況（東から）

4SX013検出状況（西から）

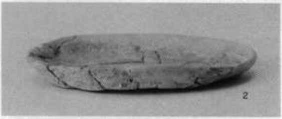
4SX040検出状況（西から）

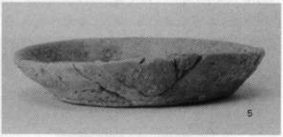
Pla.23



調査区からの四王寺山（北西）を望む

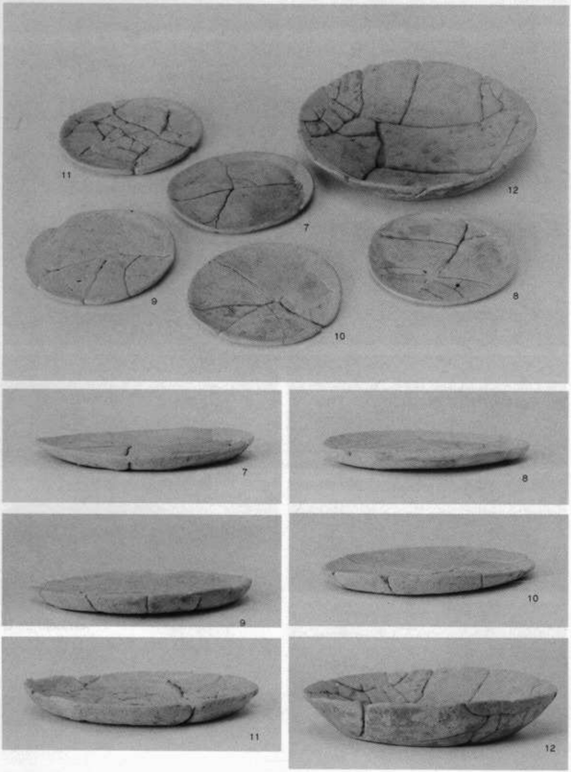
調査区から観世音寺方面（西）を望む



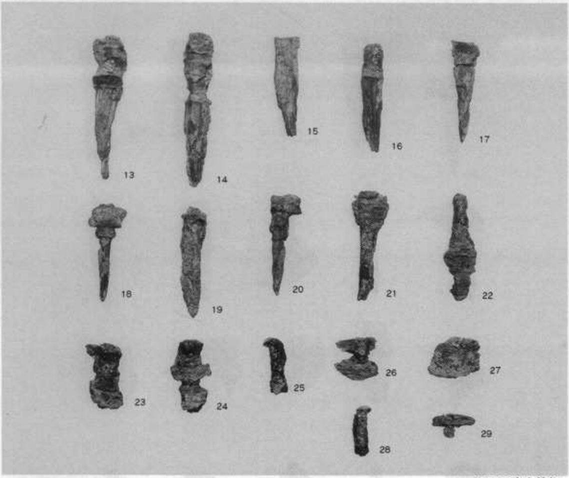


4ST030出土土器

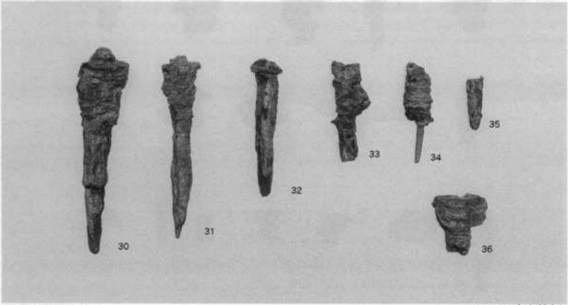
Pla.25



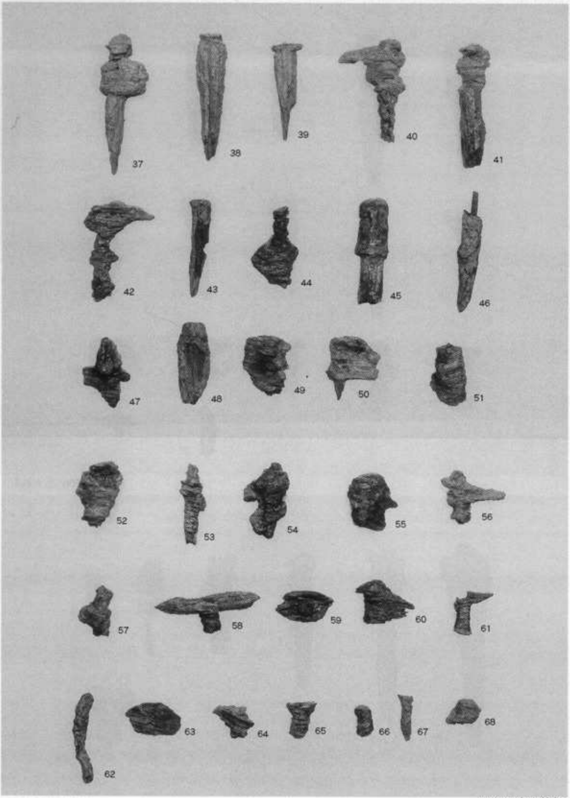
4ST055出土土器



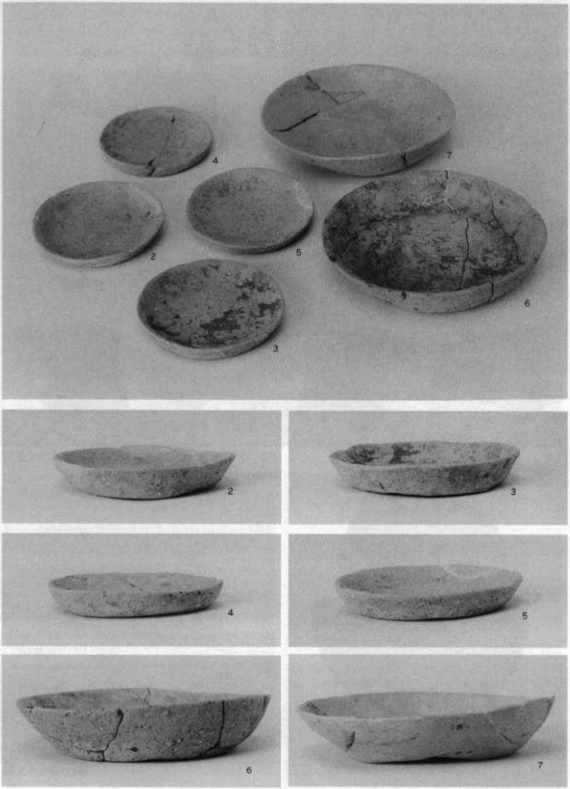
4ST005出土鉄釘



4ST030出土鉄釘

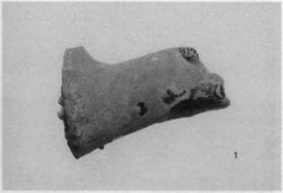

37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68

4ST055出土鉄釘

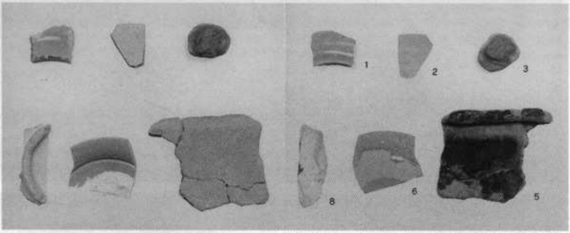


4ST025出土土器

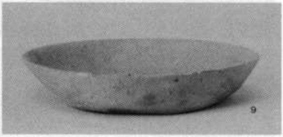
4ST005出土土器



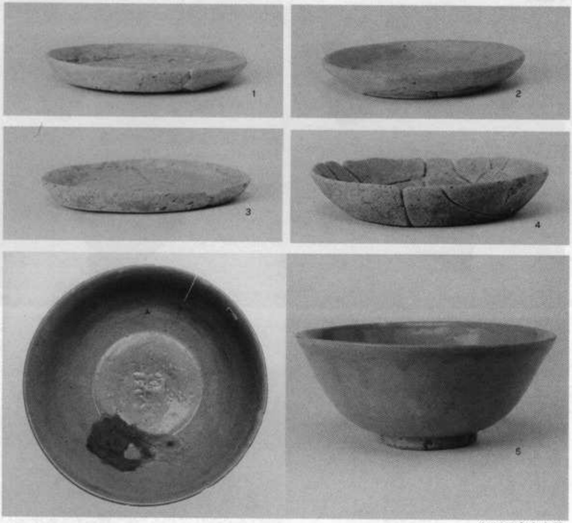
4ST001出土土器



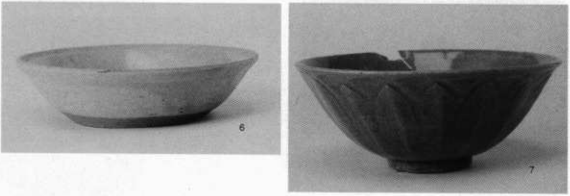
4SD032（1～3）・035（5～7）・SK002（8）出土遺物



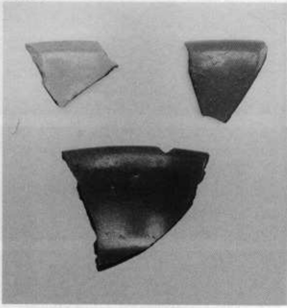
4SK006出土土器

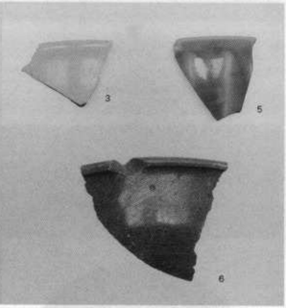


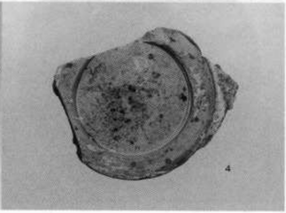
4SX013出土土器



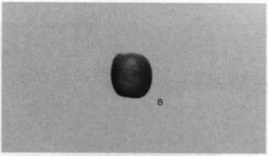
4SX040出土土器

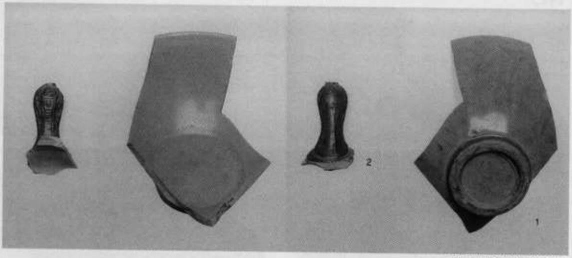




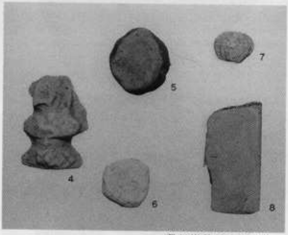


4SX060出土遺物



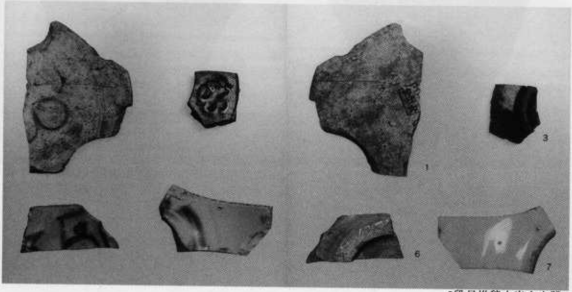


1段目堆積土出土土器



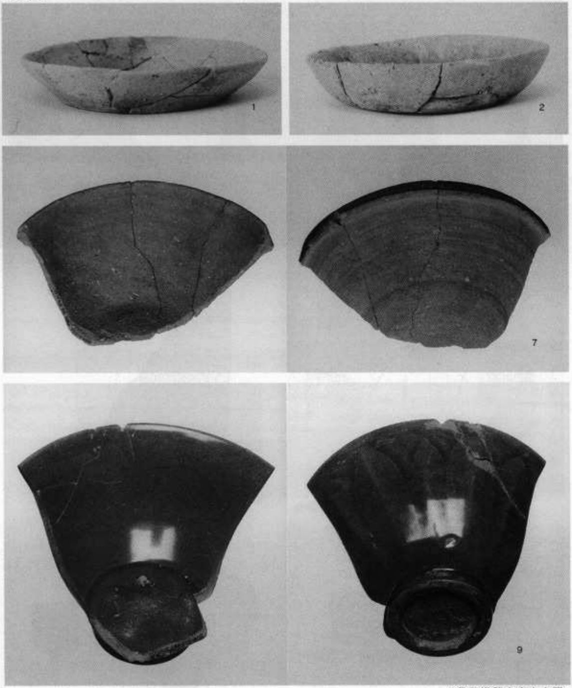
1段目堆積土出土遺物

2段目堆積土出土硯



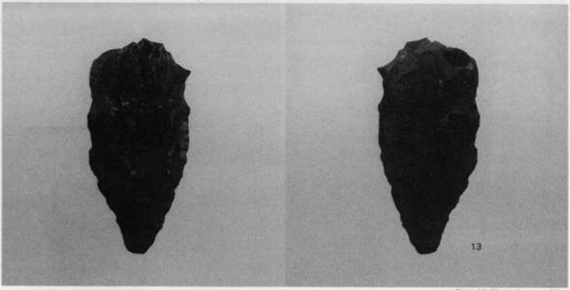
2段目堆積土出土土器

Pla.33



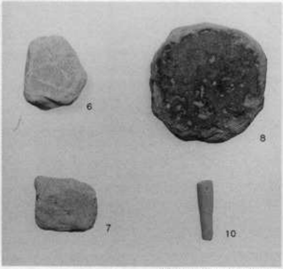
3段目堆積土出土土器

3段目堆積土出土土器

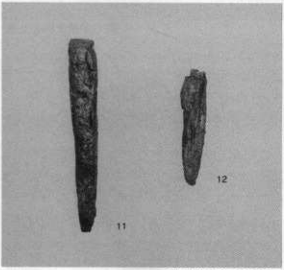


3段目堆積土出土石器

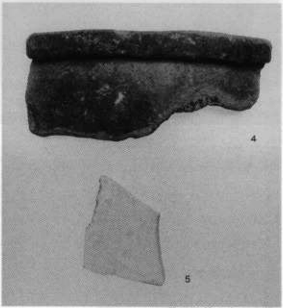
Pla.35



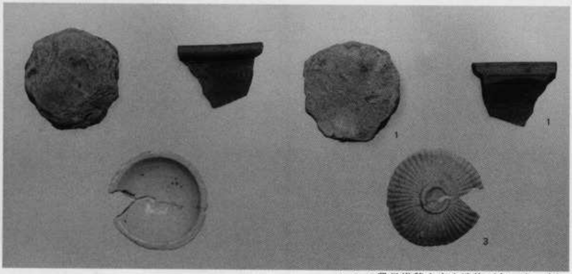
5段目堆積土出土遺物



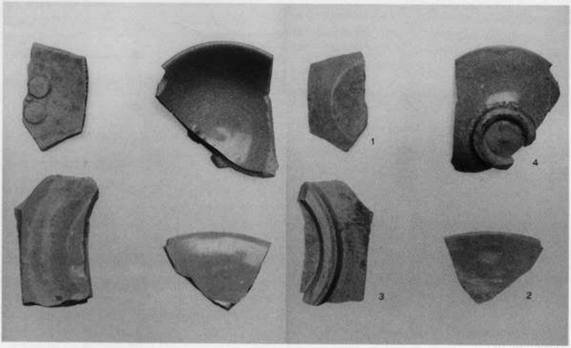
5段目堆積土出土鉄釘



5段目堆積土出土土器



4・7・8段目堆積土出土遺物（左、中、右）



表土出土土器

太宰府市の文化財　第41集

馬場遺跡

―第4次調査―

平成11年3月

編　集　太宰府市教育委員会
発　行　太宰府市観世音寺1-1-1

印　刷　株式会社チューエツ
福岡市博多区東比恵2丁目9番1号